平成２２年度
小平市市政アドバイザー会議
報　告　書

小　平　市

はじめに

市政アドバイザー制度は、市政全般について、幅広い知識と経験を有するアドバイザーの方に専門的な立場から、問題提起、助言、提言をいただくことを趣旨として、平成１９年度から新たに設置したものです。

今まで、市民の方から市長が直接に意見等を伺う機会として、タウンミーティングなどを行ってきましたが、一方で各界で専門的に活躍されている方々から、市長が直接、問題提起をいただき、懇談をすることで、これまでと違った視点での提言などをいただくこととしました。

市政アドバイザーを始めて４年目の平成２２年度は、「小平の歴史を通して、小平市の未来を展望する」をテーマに、３回の会議を開催いたしました。

今後、アドバイザーからの提言や助言につきましては、新たな市政への提案として活かしていきたいと考えています。

平成２３年６月

目　次

テーマについて ･････････････････････････････････････ 1

第１回市政アドバイザー会議 ･････････････････････････ 2

第２回市政アドバイザー会議 ･････････････････････････ 4

第３回市政アドバイザー会議

　特別企画「中学生からの提案」･････････････････････ 6

付属資料（会議要旨）

　第１回市政アドバイザー会議･････････････････････････ 19

　第２回市政アドバイザー会議･････････････････････････ 37

　第３回市政アドバイザー会議

　　特別企画「中学生からの提案」･･････････････････････ 49

テーマについて

「小平の歴史を通して、小平市の未来を展望する」

小平市は、平成２４年に市制施行５０周年を迎えます。この節目に、小平市の歴史を振り返り、現状を再認識するとともに、今後の市政運営の取り組みにどう活かしていくかなどについて、幅広く提言や意見等をいただくため、平成２２年度は、「小平の歴史を通して、小平市の未来を展望する」をテーマとしました。

アドバイザーは、平成１９年度から平成２１年度までは各年度を通して同一の方をお迎えしていましたが、平成２２年度は各回ごとに違うアドバイザーをお迎えしました。

第１回は、現在市において調査・研究を行っている市史編さんを通して、これからの小平市を展望するため、小平市市史編さん委員会の３名をアドバイザーとしてお迎えしました。市史編さんにかける想いや意義、他市と比較した小平市の歴史の特徴などをとおして、問題提起や助言をいただきました。

第２回は、市内の生活者としての郷土研究の視点から、小平市市史編さん委員会委員長と小平郷土研究会の２名、あわせて３名をアドバイザーとしてお迎えしました。郷土研究や、市民としての生活を通じて、小平市の伝統・文化の特徴的な事例などを紹介していただくとともに、次世代へ引き継ぐべきもの、今後の活用などについて、提言をいただきました。

また、第３回には、これからの５０年を担う中学生をお迎えし、今住んでいる小平に、大人になっても住むとしたら、ぜひ、こんな小平であってほしい、という思いやアイデアを提言してもらうとともに、夢や未来、小平の将来について語ってもらいました。

第１回市政アドバイザー会議

■アドバイザー（敬称略、５０音順）

大石　学（おおいし　まなぶ）

小平市市史編さん委員会委員長、東京学芸大学教授

大門　正克（おおかど　まさかつ）

小平市市史編さん委員会副委員長、横浜国立大学教授

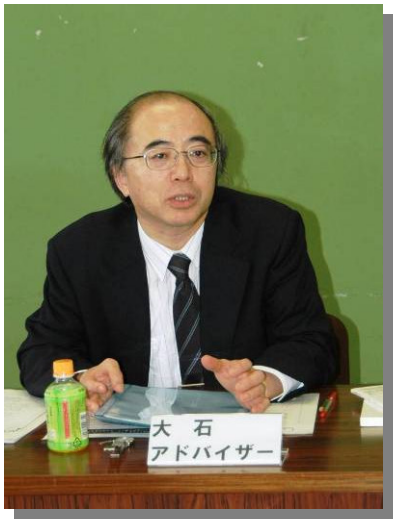
香月　洋一郎（かつき　よういちろう）

小平市市史編さん委員会委員

■開催日時　　平成２２年１１月２０日（土）１３時２０分～１４時５０分

■開催場所　　中央公民館１階会議室

■出 席 者　　小平市長、大石アドバイザー、大門アドバイザー、香月アドバイザー
（事務局）（傍聴者２名）



アドバイザーの方々
（左から）　大石学氏、大門正克氏、香月洋一郎氏

■発言の骨子

・小平市は、新しいものに対して非常に寛容に受け入れてきた歴史がある。古くから残る人・ものと、新しく入ってきた人・ものが、交流・接点を持って、今の小平市ができている。また、近隣に住んでいて、小平市と接点を持っている人たちがたくさんいる地域であり、人のつながりが軸となっている。

・小平市は、開発一辺倒の新しいものを追い求めるのみではなく、伝統と調和しながら発展してきており、バランスがいい。

・小平市には、教育・福祉の関連施設が多いが、今後これらの施設をどうつなぎ、地域に活かしていくかが課題である。

・小平市は、貴重な史料が丁寧に複写して保存されており、古文書本体を傷めることなく、自由に閲覧・複写できるシステムとなっている。サービスレベルが高く、生涯学習センター、教育センターの機能性を持っており、先進的である。今後は、資料の保存、公開、サービスなど貴重な財産をさらに発展させていく必要がある。

・市史編さんにおいて、小平スタイル、小平モデルといった新しい形を模索していきたい。市史編さん室が情報発信をすることが必要である。叙述を含めて、難しい自治体史ではなく、広く市民に読んでもらえるような、開かれた新しいスタイルの市史を作っていくべきだと思う。

・これからの市史は、行政の歴史だけではなく、いろいろな人を巻き込んで、市民の生活史をしっかり捉えていくことが大事である。

第２回市政アドバイザー会議

■アドバイザー（敬称略、５０音順）

今井　美代子（いまい　みよこ）

小平市文化財保護審議会委員、小平郷土研究会副会長

大石　学（おおいし　まなぶ）

小平市市史編さん委員会委員長、東京学芸大学教授

立川　鉄六（たちかわ　てつろく）

小平郷土研究会会長、外務省参与

■開催日時　　平成２２年１２月９日（木）１５時００分～１６時３０分

■開催場所　　小平市役所６階大会議室

■出 席 者　　小平市長、今井アドバイザー、大石アドバイザー、立川アドバイザー
（事務局）（傍聴者２名）

アドバイザーの方々
（左下から）　今井美代子氏、立川鉄六氏、大石学氏

■発言の骨子

・郷土研究会は、町誌編さんの時期とほぼ同時期に活動を始めた伝統のある貴重な会で、その活動は今日まで歴史研究を担ってきたと思う。

・市史編さんは、学術的な研究成果の集大成ではなく、一歩進んで、市民に語りかけることを目指すことが望ましい。

・小平市は、新しい人を受け入れる土壌があり、開拓の町である。しかし、小平市にずっと住んでいる人たちは、日常を記録化していないため、開拓の町としての歴史を子どもたちに残し、伝えていくために、どう残すかが課題である。

・小平市には、学校がたくさんあり、教育に熱心な気風がある。教育施設が集中しているので、小平市の特徴としてうまく活かしていくべきである。

・歴史的に守るべきであり、次世代に残していくものとして、以下のものがある。また、ただ残すのではなく、地域おこしをしながら、歴史を振り返ることができるように利用・活用していくことが大切である。

　→江戸時代の精巧な都市計画である用水路や屋敷林

　→「灯りまつり」として再現している地口行灯

　→市の無形文化財の「鈴木ばやし」

　→清流が復活し、国の史跡指定である玉川上水や小金井桜

・市としての歴史が浅いので、古い歴史を守り育てるというよりは、歴史そのものをつくっていく、新しい時代の付加価値をつけていくことが重要である。

■第３回市政アドバイザー会議
特別企画「中学生からの提案」

■参加中学生（敬称略）

樺沢　純（かばさわ　じゅん）　都立小平特別支援学校中学部
阿部　由加子（あべ　ゆかこ）　小平第一中学校
中川　翔太（なかがわ　しょうた）　小平第二中学校
森川　佳奈（もりかわ　かな）　小平第四中学校
古川　裕斗（ふるかわ　ゆうと）　小平第五中学校
谷地森　健（やちもり　けん）　小平第六中学校
大塚　海（おおつか　かい）　上水中学校
吉田　愛子（よしだ　あいこ）　花小金井南中学校
伊波　菜緒子（いは　なおこ）　白梅学園清修中学校
城戸　珠璃亜（じょうと　じゅりあ）　創価中学校

■開催日時　平成２３年３月２９日（火）１０時００分～１１時４５分

■開催場所　小平市役所６階大会議室

■出 席 者　小平市長、樺沢さん、阿部さん、中川さん、森川さん、古川さん、谷地森さん、大塚さん、吉田さん、伊波さん、城戸さん
（司会進行:佐藤指導主事）（事務局）（傍聴者２７名）

●第３回市政アドバイザー会議は、当初３月１２日(土)に開催する予定で準備を進めていましたが、東日本大震災の影響を考慮し、開催日を変更しました。このため、小平第三中学校は、残念ながら当日のアドバイザー会議にご出席いただけませんでしたが、事前に準備していただいたレポートを１０ページに掲載しました。

■事前準備

・キーワードなどをヒントに、５０年後を想定した夢や未来、小平の将来について各学校で生徒会の討議などを経て、事前に提言をレポートとして提出してもらいました。

・先生や生徒に対して、複数回のガイダンスを行い、当日のアドバイザー会議に臨んでいただきました。

※第３回市政アドバイザー会議の開催にあたっては、各学校のご協力をいただきました。

■事前レポート

各学校から提出された事前レポートです。

※会議の概要については、４９ページ以降の付属資料を参照してください。

都立小平特別支援学校中学部　樺沢　純

五十年後の未来には、段差等を減らしてほしいと思います。できるのであれば、段差をなくしてほしいです。なぜなら、車いすをこぐ人は、前の車輪が上がらないから大変です。おす人も段差に足をひっかけてケガをしてしまうかもしれません。同様に、歩行器と杖も同じことがいえます。障害者の方なら、その様な事故を経験しているかもしれません。

ですから、段差をなくしてほしいと思いました。次に、地面を平らにしてほしいと思いました。道が坂だと、車いすや歩行器を使っている人が勢いあまって人をひいてしまいます。同様に杖の人も転んでしまうかもしれません。次に、街灯を増やしてほしいです。なぜなら、段差に足をひっかけてケガをしてしまうから危険です。また、歩道を広くしてほしいです。狭いままだと、人をひいてしまったり、人の足をふんじゃったりしてしまうかもしれません。次は、ルネ小平にエレベーターと駐車場をつけてほしいです。車いすのままでは、階段は上れないですし、駐車場がないと、車をとめる場所がありません。次に、駅のエレベーターを広くしてほしいです。小川駅のエレベーターは、小さい車いすだったら二台、大きい車いすは一台も入らないかもしれません。だから、駅のエレベーターを広くしてほしいと思いました。次に、小平の人口をもっと増やしてほしいと思いました。なぜなら、たくさん人がいたほうが、にぎやかでいいと思ったからです。最後に、雨の日でも、みんなと遊べる広場がほしいです。小平特別支援学校に通っているみんなの家から家にいくまでは一時間かかるかもしれません。遊べたとしても、その日が雨なら遊べません。ですから、雨の日でも遊べる広場が近くにあってはいいかなぁと思います。最後に、福祉を充実させてほしいです。障害の重い子は、母が死んだらどうなるんですかと聞きたくなるぐらいです。ですから福祉が充実してほしいです。五十年後の未来はそんな風になっていってほしいです。

小平第一中学校　阿部　由加子

「食の大切さから」

私は食べることが好きで、特に毎日ある給食が楽しみです。給食には小平市の農産物が使われることがあり、とても安心できます。生産者に直接話を伺うことができるし、育っている状況を自分の目でみることができる点が良いと思います。

これからの時代、人間がどんどん増えていき、食糧自給率の低い日本は食料を確保するのが難しくなると予想されています。その中でも今の豊かな日本では好き嫌いが多く、食べ物を粗末にする場面がよく見られます。このようなことを一気に直そうとしても無理があります。今から少しずつでも見直していかないといけません。

私が望む未来の小平は、食べ物を大切にし、そこから発展して物を大切にするエコな小平です。

小学校 5，6 年の時、担任の先生が食の大切さの授業を行ったのが印象的です。給食は全て残さずに食べるというのがモットーで、残ったご飯は先生が塩おにぎりを作ったり、先生が生徒に食べ物を盛りに来てくれたりしました。また、特別講師として食肉市場の職員さんが小学校に来校して、食肉市場に届く差別的な手紙のことを話してくれました。このように、食の大切を学ぶことは自己を高められることとなり、良いことであると思いました。
全ての小学校で行っている訳ではないので、食の大切さの授業は一度はやるべきだと思います。

食の大切さから学べることはたくさんあり、限りのある資源を大切にすることも大切です。買い物に行ったとき、ビニール袋を一枚もらうともらわないでは、大きな違いが生じると思います。毎回のビニール袋をもらわない一歩を積み重ねることで、未来は大きく変わります。

大きく一気に変わるというのはとても難しいので、今から小さな一歩を積み重ねて将来の小平を変えていけたらいいなと思いました。

他のことでも市民が自らエコに挑戦して、リサイクルにも積極的に参加していく体制ができれば、より良い小平ができるのではないかと思います。

小平第二中学校　中川　翔太

僕達小平二中は、この小平が改善すべき点をいくつか見つけました。

まず一つは、環境面において、ゴミが至るところに捨てられているということです。路上だけではなく、線路内、花壇や植木の中、さらには学校の敷地内にまで捨てられていることもあります。地域の方々もボランティアで清掃活動を行なってくれていますが、ゴミを拾ったそばから捨てる人がいるなど、あまり効果は見受けられません。

この問題への対策として、僕達はゴミ拾いを小平市の行事としてはどうかと考えました。頻度は月に一度、形式は自由参加とし、参加賞を用意することにより、より多くの人に参加してもらえるのではないかとも思います。そうして、市民の方々に、「ゴミを捨ててはいけない」、「捨てられているゴミは極力拾うようにしよう」、「街がきれいだということはとても快よい」というような気持ちになってもらえれば、ゴミは減り、きれいな街になると思います。

次に、経済面についてです。

小平市は住居はとても充実しています。ですが、企業が少ないため大きな税収がありません。また、商業施設も多くはなく、商店街もあまり発展していません。そして、これらの根本的原因は、小平に住む人が少ないということになります。

この対策として、小平を人が住みやすい街にしよう、という意見が出ました。そのため、まずは商店街を発展させるべきだ、という考えに至りました。具体的には、先ほどのゴミ拾い行事の参加賞に、小平市内の商店街で使える、クーポンなどをつけてはどうでしょうか。そうすれば、商店街を利用する人は増え、地域は活性化し、市全体も、にぎやかになると思います。活気に溢れた街なら安心して住むことができます。このようにして、小平に住む人が増えれば、企業や商業施設も進出し、市の収入も増え、経済的にも発展すると思います。

最後にルールを守る人が少ないということです。

小平市では、横断歩道などを渡らず、平気で信号を無視したり、車道を横切る歩行者が多く見かけられます。

この問題に関しては、地域の方々の協力を得て、市全体が根気よく呼びかけていくしか方法はないと思います。

僕達小平二中は、隣接する小川駅のロータリーを横ぎる人に対し、小平六小と連動して呼びかけ運動を行なっていました。残念ながらほとんどの人は見向きもしませんでしたが、それでも、こちらの呼びかけに応え、ロータリーを横切ろうとしたのを止めてくれた人もわずかですがいました。さらに、その数は日に日に増えていったのです。

そこで、今度は市全体で、もっと長い期間このような呼びかけを続ければ、それに呼応し、ルールを守ってくれる人は増えていくはずです。

以上三点が、改善すべきだ、と感じた問題点です。僕達が考えた対策は、一つの意見にすぎません。他の案もきっとでることでしょう。ただ、小平をより良くするために何よりも大事なのは、市民が一丸となり、協力し合うことだということを、忘れないでください。市民が自分達の住んでいる街のために手と手を取り合い、力を合わせれば、この小平は、もっと素敵な市になるでしょう。

どこまでも美しく、どこまでも活気に溢れ、どこまでも規律を重んじ、そして、どこまでも人と人とが協力し合える、それが、僕達の思い描く理想の小平市です。

小平第三中学校　徳山　景子

私は小平市が大好きです。私が思う小平市の良い所は三つあります。

一つ目は、高齢者と児童の関わりが多いことです。私が通っていた小平第二小学校には高齢者交流室という部屋があり、高齢者の方と囲碁や将棋で楽しむことができます。また、高齢者の方と一緒に給食を食べることで正しいお箸の使い方や礼儀、昔の様子などを聞くこともできます。こういうことを通じて学べることは都会や他県の小･中学校には体験できないことだと思います。私はこのような経験で毎日会う高齢者の方と気軽に話せるようになりました。このような高齢者と児童の関わりが多いことは高齢者の方にとっても、児童にとってもいいことだと思います。なので、私は小平市がこれからも今のような高齢者と児童との関わりが多い町であって欲しいなと思います。

小平市の良い所の二つ目は、ウドやブルーベリーなどの特産物が多い所です。ウドやブルーベリーを栽培している市や県は少ないと思います。私は小学校の調べ学習で初めてウドという野菜を知りました。全国にはウドの味が分からない人もいると思います。また、小平市の畑でできたブルーベリーを実際に食べてみましたが、とてもおいしく、自然の甘みを実感しました。このようにウドやブルーベリーなどの小平市の特産物をブランド化して、全国にアピールしたらいいなと思います。

良い所の三つ目は、緑が多い所です。東京都は高層ビル群があり、全国の中では自然が少ないと思われがちです。しかしその中で小平市は畑が多く、都会のビル群に比べて自然が多いと思います。自然が多いとヒートアイランド現象になりにくく、素敵な空間ができます。小平市を通過するグリーンロードは夏でも木影で涼しく、ランナーでとても賑わっています。自然は環境問題などで今では世界的に認められてきています。他の市や県にとって小平市の町づくりはとても素晴らしいと思います。この小平市の町づくりが他の市や県のさきがけとなってくれたら嬉しいです。

ここまで小平市のいい点について挙げてきました。しかし、小平市にはこうしたらもっと良くなるなと思う点もあります。

それは、教育のお金の使い方が適切でないことです。私が通っている小平第三中学校ではスプリンクラーが付いていなくて、水撒きは生徒で行っています。部活の遠征で他市の中学校に行った時には、スプリンクラーを使って短時間に水撒きをしていました。また、去年届いたテレビは前に届いたテレビがまだ壊れていないのに届きました。このようなお金をできればスプリンクラーなどの設備にあてて欲しいなと思います。

私は小平市に生まれて良かったと思います。私みたいに、小平市民が全員、小平市に生まれて良かったなと思えるような小平市で、いつまでもあって欲しいなと思います。

小平第四中学校　森川　佳奈

「５０年後、住みやすい、住みたい小平にするために」

５０年後の小平に求めることを中学生という立場から考えて、私たちは大きく二つのテーマを見つけました。

一つは「安全」に関してのことです。今、小平市では安全への配慮が欠けていると思われる点がいくつかあります。例えば決して広いとは言えない道路、玉川上水沿いを初めとした薄暗い道などがあげられます。こういった道は通学路となっている学校が多くあります。また、それらの道はゴミ収集車や公共バス等の大きな車が通ることもあり危険に繋がると思いました。玉川上水の通りでは部活動によって帰宅が遅くなったり、一人で帰らなくてはいけなくなってしまったりする場合、辺りが暗いのに加え、茂みが多いことから不審者が来ても分からない状況にあります。

ではどのように解決したら良いのでしょうか。道路を広くしたり、街灯を増やしたりする工夫が上げられます。しかしただ安全にするだけでなくもう一つ工夫を考えました。それは、高齢者だけでなく、障害者の方などにも配慮のある「ユニバーサルデザインとバリアフリー」です。バリアフリーは障害、障壁を取り除く、ユニバーサルデザインは誰にでも使いやすく、公平に、自由に、をモットーにした施設・製品・情報のデザインです。この企画に則った物を増やし、安全なだけでなく、高齢者やいろいろな人達と簡単に、自由に関わりを持つことがしやすくなるような工夫を期待しています。

二つ目は、「教育」に関することです。教育といっても学校の授業のことではありません。私たちは今、親だけでなく祖父や祖母のおかげでこの街に暮らすことができ、学校に通うことができています。だからこそ、学校生活を精一杯頑張り楽しむことが中学生の私たちが今できる精一杯の恩返しではないかと思いました。現在、学校やその周辺の施設で、「こうなったら良いな」と私たちが思うことがいくつかあります。学校や体育館といった施設の改修。教育と直接関係があるかは分かりませんが、駄菓子屋さんなどの気軽に楽しめるような場所が欲しかったりもします。イメージですが、駄菓子屋さんは店の人との会話なども楽しめそうな気がします。他にも学校の行事に関することや、いろいろと期待したいことはたくさんあります。

安全にいろいろな人達と簡単に、自由に関わろうと行動することができる。自分の子供や孫達が健全に、精一杯楽しむことができる。そんな街に住みたいと思い、「安全」「教育」の工夫を期待します。

小平第五中学校　古川　裕斗

「スポーツの盛んな小平市に」

僕は今、小平市の陸上クラブに所属し、陸上競技をしています。種目は走り幅跳び。中学から始め、今年は平成２５年に開催される東京国体の強化選手候補、そして、東京都強化選手に選ばれました。今は、来年の全日本大会に出場するために、努力を重ねています。

しかし、練習をする中で感じているのは、小平市のスポーツをするための環境がよくないと言うことです。その一つは、僕の学校には陸上部がないことです。そのために、僕は毎回の練習に、府中や八王子、新木場などと言った遠い練習場に行かなくてはなりません。陸上部がある学校では、毎日仲間と一緒につらい練習を乗り越えているのに対し、陸上部のない小平五中では陸上競技をする生徒が一人しかいないのが現状です。確かにクラブ仲間との絆は深まりましたが、練習は週にたった２回です。これでは毎日部活動で練習をしている人たちに遅れを取ってしまいます。例えば、昨年の東京駅伝で小平市はよい成績を収められなかったと聞いています。小平市のすべての中学校に陸上部があれば、そんなことにはならないと思います。

もう一つは、競技場の問題です。小平市には陸上競技の大会には不可欠である、タータンの競技場がありません。大会と同じ環境で練習ができないと言うことは、うまく実力が発揮できないことにつながります。実際に、僕の知っている人で、そのことが原因で実力が思うように発揮できず、都大会で入賞できる実力がありながら、入賞を逃してしまった選手も、この小平市にはいます。実際、タータンの競技場がある市の選手の都大会出場率や競技成績は、ない地域よりよいというデータもあります。

これらのことから僕が言いたいのは、小平市がスポーツをしやすい環境をもっと整えていただきたいと言うことです。もちろん、僕としては陸上競技の環境を整えてもらいたいのですが、他の競技でも、同じことがいえます。たとえば、サッカーや、野球ができる競技場も数が少なく、土曜、日曜の使用申請では、たくさんの団体が予約に殺到し、あっという間に予約で埋まってしまい、なかなか使用できないで困っている団体が多いということも聞いています。市民が気楽にスポーツに親しめる環境、そして、強くなりたい選手が実力を十分に伸ばしていける環境をこの私たちの街小平に作っていただきたいと思います。２年後には東京国体があります。これをよい機会に、様々なスポーツイベントなども企画してスポーツを盛んにし、将来的には、スポーツ都市小平として、市民が楽しくスポーツに親しむとともに、世界で活躍する一流のアスリートが続々と出てくるような小平市にしてほしいと願っています。

小平第六中学校　谷地森　健

「地域の輪と教育について」

二〇五〇年、東京都小平市は、新たな取り組みを始めました。五〇年後にこんなニュースが流れるような小平市になって欲しいと思います。その新たな取り組みというものを僕は二つ考えてみました。

一つは教育についてです。今、日本の就職率は低くなっています。この不景気の中で企業が社員を削減しているということもありますが、就職すること、仕事をすることに興味が湧かない、面倒くさい、という理由の若者が増えているようです。そういった若者はどうしたら仕事に興味が湧くのでしょうか。僕はこう考えます。現在多くの中学校で職場体験が行われていますが、それ以外に現役でその仕事の第一線で活躍している方々を学校にお招きし、話を聞くことです。そしてその職に就いた理由、やっていて楽しいこと、職を手につけることの大切さや面白さなど、仕事へ興味が湧くような話をしてもらえれば、少しでも興味が出てくると思います。また、こんな仕事に就きたい、そのためには、どんな資格が必要なのか、高校は卒業しなければならないのかなど将来の事を真剣に考える機会が増えてくると思います。若者が夢をもつことが、市全体を活性化させることと思います。

二つ目は、地域の輪についてです。僕の出身の小学校から、すぐ近くの所に「さわやか館」というデイサービスセンターと、児童館を両方備え合わせたようなものがあります。学校行事として、しばしばそこにいるお年寄りとの交流会などをしていました。お年寄りから教わることは多かったです。囲碁、将棋なども教えてもらいました。それから、僕達のやった紙芝居劇で涙していただいた事もありました。今、考えても貴重な時間だったと思います。こういった場所を増やしていけば地域の輪も広がり、温かい小平になると思います。

これまでのような事を実現するためには多くの人々の意識を変える必要があると思います。

僕の考える未来の小平はこんな感じです。人々が温かくなれば市全体も温かくなり人々が希望をもっていきいきと生活できると思います。僕の育った小平市。いつまでも素晴らしく、住みやすい場所であって欲しいです。

上水中学校　大塚　海

僕には小平市についての要望が四つあります。

一つ目は、学校にエアコンをつけてほしいということです。毎年、夏になると、熱中症によって倒れる人が続出します。去年は異常な猛暑でした。もしかしたら今年はもっと暑くなるかもしれません。そうなると、更に熱中症になる人が増えてしまう可能性があるということです。そうしたことにならないためにも、エアコンをつけてほしいと考えました。まず、最初にとりつけるとするなら体育館がいいのではないかと思います。その理由は、長い時間体育館に居続ける朝会時などに、具合を悪くする人が多いからです。体育館に設置することができたら、各教室にもつけた方が良いと思います。最近になって各教室に暖房が置かれましたが、むしろ深刻なのは寒さではなくて、暑さのほうだと思います。

二つ目は、三年生の教室を最優先して空気清浄機を取り付けてほしいと思います。冬になると、空気が乾燥してウイルスや細菌が活発になり、病気になる人が増えます。特に三年生は、受験をひかえているので、体を大事にしなければいけません。それには、そういったウイルスや細菌の拡大を防いでくれる空気清浄機が受験生のためとなるのではないでしょうか。

三つ目は、小平市に大規模な公共施設を作ってほしいことです。例えば、小金井公園などのような大きい公園です。小平は周辺の市と比べて人口が多いので、小さな子供から大人まで楽しめる大きな公園を小平に作れたらいいのではないかと思います。その他にも、大きなデパートを建ててほしいということです。小平にも国分寺や武蔵小金井のような建物ができれば利用者や利用回数が増え、小平市に親しみを感じる人が今まで以上に多くなるのではないでしょうか。

四つ目に、小平市の交通について、少し気にかかったことがあります。まず、道路がせまいことです。中でも、五日市街道や青梅街道は危険で、渋滞が頻繁に起こっています。もう少し道が広ければ、歩行者や自転車、そして車も、安全に、楽に通行ができると思います。

僕たちが住んでいる市、小平が、今まで以上に住みやすく、皆が笑顔になるような楽しい場所になったらいいなと思っています。

花小金井南中学校　吉田　愛子

「緑を今よりもっと増やして欲しい」、「安心・安全な小平になって欲しい」、「人と人との繋がりが深い小平になって欲しい」。これは、花小金井南中学校の全校生徒に「こういう小平に私は住みたい」というアンケートをとった結果、どの学年でも共通して多かった意見です。私はこの三つの中で、「安心・安全な小平になって欲しい」という意見に着目しました。

私は、通学路が明るく、毎日安心して安全に登下校できるような小平になって欲しいと思います。現在小平には、街灯が無く暗い通学路が多くあります。通学路が暗い道だと、事故や事件が起こりかねません。街灯が無く暗い道だと、自然と人も通らなくなり、不審者が出たりします。その道を通学路として利用している学生達は、周りに人がいないと助けを呼ぶことができず、危険な目に遭う可能性が高くなります。また、自転車等の交通事故も危険が増します。このような事件や事故が原因となり、尊い命が奪われたり、被害にあったりする人がいることは、本当に悲しいことだと思います。被害者を少しでも減らすためには、暗い道に一つでも多くの街灯を設置する必要があると思います。いつでも明るい街で、学生達が毎日安心して登下校できるような小平になって欲しいと思います。

また小平の学校、特に小学校では、保護者の方々が子ども達の安全を見守るために、いろいろな場所でパトロール運動を行っています。このような活動は「人と人との繋がり、地域活動」と「安全な街作り」とが一つになっているものだと思います。人と人とが繋がって協力するから、安全な街が作れる。でも、人と人とが繋がるということは、一見簡単そうに見えて、実は難しいことだと思います。だから、人と人とが触れあえる場所や活動を多くすることで、人々の繋がりが自然に深まるようにすることができれば良いと思います。例えば、緑を増やし、公園を増やし、人々の憩いの場所を増やしたり、今地球規模で問題となっているCO_2削減のためのＥＣＯボランティア等を推進したり、人々が集える機会を増やすと良いと思います。そうすることで、緑が増え、ＥＣＯな町になると思うし、人と人との繋がりも深くなり、そこから安全な町にもなっていく。このような小平になっていって欲しいと思いました。

白梅学園清修中学校　伊波　菜緒子

「玉川上水から広がる未来」

私は、どこも土地が平らで緑が多いので、小平が好きです。自然豊かなこの街は、五十年後はもっと住み良い場所になっていて欲しいです。そこで、私が考える五十年後の小平のかたちを表したいと思います。

まず、小平の良い所は、玉川上水が流れていることです。私の住んでいる所は特に、様々なイベントや日常が玉川上水を中心に広がっています。例えば豊かな木々や、ごみ拾いなどのボランティア活動などです。我が家では川ぞいを休日に散歩することもあり、緑道は学校の通学路でもあります。とにかく、私の生活に玉川上水はなくてはならないのです。

しかし、舗装の進んでいない道は雨の日はもちろん日頃から転びやすく、気をつけなければなりません。また、上水ぞいだけではなく、小平市全体が、舗装が未熟なのか春先はとても埃っぽいです。いつも外を歩いているので、これは私にとってはとても大変なことです。

これらの点を改善できれば、車いすの方や老齢の方も、一年を通して玉川上水沿いを歩いたり、四季を楽しんだりできるのではないかと思います。

舗装というとアスファルトを思い描きましたが、アスファルトでうめたててしまうと、折角の景観が台無しになってしまいます。道路はコンクリートで整え、上水沿いは、ボランティアで小石を除いたり柵を作るというような活動で整備すればいいのではないかと思います。

四季の象徴である玉川上水は、ごみを取り除き、道を通りやすくすることで、もっと様々な人が安心して利用できると思います。また、生えている植物の名前や、近くにある店などをまとめて紹介することで、単なる通り道ではなく、玉川上水自体を名所のようにできるのではないでしょうか。

今の小平も好きですが、このようなことに目を向け、玉川上水沿いだけではなく、他の場所も、全ての市民が使いやすいように改善すれば、土地が平らな小平はもっと良い町になるのではないでしょうか。小平がそんな風になったなら、私はおばあちゃんになってもこの町に住んで、緑の中を散歩したいと思います。

創価中学校　城戸　珠璃亜

こんにちは。創価中学校の城戸珠璃亜です。宜しくお願いします。

この話をいただいて、創価中学校２年生では、全員で将来の小平市に目を向けていこうと取り組みを始めました。まず初めに、５０年前と現在の小平について校長先生から教えて頂き、その後各班に分かれて、このようなマインドマップを作成しました。

各班で様々なアイディアが生まれ、とても有意義な発表会ができました。その中で出たアイディアのうち、いくつかを紹介します。

一つ目に、「玉川上水にホタルを！」です。先日、上水公園テニスコートの隣に建っていたホタルの飼育施設が撤去され、いま身近にホタルを見ることができなくなりました。そこで、ボランティア等を募集して定期的な清掃を行う、木や花を植える、またそのための「玉川上水友の会」を結成する、というのはどうでしょうか。私たちの子どもやその次の世代まで人々と自然が共存できる玉川上水を残し見せることができるようにしていきたいです。また、小平の人々が守り大切にし続けてきた玉川上水の美しい環境をこれからの世代である私たちが受け継ぎ、守っていきたいと思います。そして５０年後には施設ではなく玉川上水にホタルを呼べるような自然と調和した街になって欲しいと思います。

次に、「地域交流の大拠点、新中央公園プロジェクト！」です。中央公園の土地を広くし水遊びの施設を造ったり、水をきれいにして魚を増やし、釣りができるようにしたりすると地域の活性化につながります。また、ドッグランや展示室を造ったり、和室を設けてお茶会等ができるようにしたりするという案も出ました。こうすることにより地域の交流が更に深まり防犯にもつながります。

ほかにも、面白い案として、小平の特産物ブルーベリーで小平市にテーマパークを造り、ブルーベリーのキャラクターも作ろうというものです。そうすることにより、小平で初めてブルーベリーが栽培されたことを伝統として伝えいくことにもなります。また、大自然の中にツリーハウスを造ることも提案したいと思います。自然の中で勉強したり遊んだりするなかで感受性が豊かになり、思いやりのある子どもを育てることができるのではないでしょうか。

最後に、小平を発展させていくにあたり、一番大切なことは、やはり地域の人と人との交流、触れ合いだと思います。私は登校する時に毎日会う人にあいさつをしています。初めはあいさつを返してくれなかった人も、だんだんと心を開き相手の方からあいさつをしてくれるようになり、とても嬉しかった経験があります。小平に生活する者として、誰もが笑顔で過ごせる街、何世代に渡っても住み続けたいと言われる街になって欲しいと思います。私も、もっともっと勉強して、地元に貢献できる大人に成長していきたいです。

付属資料（会議要旨）

平成22年度第1回小平市市政アドバイザー会議要旨

開催日時	平成22年11月20日（土）13時20分から14時50分まで
開催場所	中央公民館1階会議室
出席者	小林　正則　市長 大石　学　アドバイザー（小平市市史編さん委員会委員長、東京学芸大学教授） 大門　正克　アドバイザー（小平市市史編さん委員会副委員長、横浜国立大学教授） 香月　洋一郎　アドバイザー（小平市市史編さん委員会委員） （事務局）伊藤企画政策部長、有川政策課長、篠宮政策課長補佐、細村主査 （傍聴者2名）
会議次第	1.開会 2.市長あいさつ 3.アドバイザーからの問題提起、意見交換　集約 4.閉会
市長	小平市では、市政全般について、幅広い知識と経験を有するアドバイザーの方に、専門的な立場から、直接、問題提起や提言をいただくため、平成19年度から市政アドバイザー会議を設置した。毎年度アドバイザーの方を迎え、初年度の平成19年度は、各アドバイザーの専門分野を中心に、また平成20年度は「協働」をキーワードに、「地域で支えあうまちづくり」をテーマとして、昨年度は、「小平の売り出し方、盛り上げ方」について、様々な提言やご意見をいただいた。 今年度の市政アドバイザー会議のテーマは「小平の歴史を通して、小平市の未来を展望する」とした。小平市は平成24年に市制施行50周年を迎える。市では、魅力ある郷土を後世に伝え、これからも小平市に住み、働き、学び、訪れたいまち、としての魅力づくりに努めることを基本として、平成20年度から、市史編さん事業に取り組んでいる。まもなく訪れる50年を節目に、小平市の歴史をあらためて見つめ直し、現状を認識するとともに、今後の市政運営の取り組みにどう活かしていくのか、を考えていきたい。 今回、小平市の市史編さんに携わり、調査研究を進めていただいている、小平市市史編さん委員会委員長で、東京学芸大学教授の大石学先生、小平市市史編さん委員会副委員長で横浜国立大学教授の大門正克先生、小平市市史編さん委員会委員の香月洋一郎先生、の３名をアドバイザーとしてお迎えし、会議を進めていきたい。アドバイザーの皆様には、行政とは違った視点からの問題提起や斬新な助言、示唆などをいただきたく、会議のコーディネートについては大石先生にお願いし、アドバイザーの皆様相互の闊達なご議論などをいただけ

	ればと思う。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	私たちは、小平市史を通じて小平市に関わってきているが、今までに関わってきた中で感じていること、あるいは分かってきたことなどをまず話し、それから今後市長に対して、こうして欲しい、こうあったらいい、という提言をできたらと思う。 パート担当からいくと、私が江戸時代、大門先生が近現代、香月先生が民俗・自然となっているので、まず簡単に今までの成果と課題を話して、市長を含めて、議論を進めたいと思う。 では、私が担当する「江戸時代」から、小平市域の江戸時代の特徴は「開発」であり、特に江戸時代中期くらいから、一気に新田が開かれていく、非常に活力に富む時代である。この時代は生産力が伸びるというだけでなく、それが江戸都心の江戸の町と密接に結びついてくることも特徴といえる。 例えば市域で野菜をつくると、江戸に送り出して、江戸から逆に下肥が入ってくる、そういうサイクルが出来上がってくる。この時期、市域の個性が形づくられると同時に、江戸市中との交流や、市域の周辺地域との交流も深まる。例えば、小金井堤の桜も、逆に江戸から人々を引っ張る力になっている。 江戸時代は 260 年余あるが、特に後半の江戸市中とお互いに引き合い、情報とか、経済あるいは社会など、同質の部分が非常に見えてくる。逆に言うと、今の東京都の中に小平が位置づくスタートが切られたという印象がある。そういう意味では、都市化あるいは都心との同質化というもののスタートとして、まず江戸時代を見ることができる、そんな視点から小平を把握していきたいと思う。 同時にそれを支える史料だが、小平市の中央図書館を中心に、大変貴重な江戸時代の史料がある。これはおそらく東京都を見渡しても指折りの貴重な史料であり、よく保存ができたと思う。多くの場合、散逸してしまったり、無くなったり、事故にあってしまったりということで、これだけ残っているのは稀有な例で、それをまたよく、きちんと図書館の資料目録を作り複写して市民に還元するというスタイルをとっている。こうした成果をこの市史編さんで存分に使いながら、さらにどのように今後に残していくかということも、市長とあわせて相談できたら、と思っている。
大門ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	市史の「近現代」を担当している。 小平の歴史というと、必ず新田開発の話が出てくる。それ以降のことは、なかなか歴史の中に出てこない。今回の小平市史を通じて、小平の近現代の歴史の輪郭を浮き彫りにしたい。新田開発だけでなく、こういう特色を持っている、

	ということをぜひ明らかにしたいと思う。 　その際に、戦前の明治以降のいろいろな歴史もあるが、現在の小平市にとって非常に大きかったことは、戦後の昭和30年代、1960年代からの都市化・郊外化であり、そのもとでの市民生活のあり方だと思う。 　新しい人が入ってきて、またそれ以前からいる方を含めて、地域でいろいろな接点が生まれてくる。例えば、小学校・中学校のＰＴＡ関係の資料をかなりたくさん収集した。学校そのものが作る資料はもちろん、ＰＴＡの資料の中には、当時の市民生活、子どもの教育観が非常によく出ていて、真剣に議論している様子がよく分かる。ＰＴＡに限らず、そういう市民生活に関する資料、いろいろな団体の機関紙や会報、市民生活に関する新聞資料を収集することになると思う。生活、暮らしの面から、戦後の大きな変化、今に至る過程を明らかにしたいと思っている。 　そういった中でひとつだけ、小平を歩いてみて、あるいは調査を始めてみて印象的なことを話したいと思う。 　小平は、玉川上水はあるが、あまり特色がないように最初思っていたが、「教育と福祉のまち」というのが私の強い印象である。例えば、東京都や国の関係の福祉施設、それから市の小・中学校だけでなく、大学が非常にたくさんある。実際に地域に住んでいる方や周辺にいる方は、小平市の教育や福祉施設だけではなく、東京都の施設や特別支援学校、大学を含めて、小平とつながりを持って、通ってきたり、また暮らしたりしていると思う。暮らしというところで見ていくと、小平には教育と福祉の関連施設が非常に多くあって、小平市史の中で、市の小・中学校だけではなく、そういった教育と福祉についてぜひ描きたいと思っている。 　そのことは同時に、これだけあるいろいろな関連施設を、小平市が今後どうやってつないでいって、地域に活かしていくのか、そういう課題もあると思う。地域の中から、暮らしの中から見た、都市化や郊外化、教育、福祉について、ぜひ市史に反映していきたいと思う。またそういう関連の資料を新しく発掘していきたい。 　先ほど大石先生が言ったように、江戸時代についてはかなり図書館で資料収集できたが、近現代については、この小平市史が言ってみれば出発点のようなものなので、期間としてはそれほど長くはないが、ぜひこの機会に行政文書だけでなく、市民生活に関わる広範な資料を収集して、それをぜひ市史に活かしたいと思っている。
香月ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	市史の「民俗」を担当している。 　私が監修する巻は、民俗のほかに、自然地理と考古が入っている。ただし、

	全体の分量の７割は民俗で、この巻にかけている手間、予算も民俗が同じくらい占めているので、民俗を中心に少し説明したいと思う。 　今、お二方から歴史の担当の説明があったが、民俗というのは歴史に比べると、対象の輪郭がはっきりしないというか、私から見ると歴史のアプローチは、たいへん輪郭がはっきりしたところがあり、まず古文書なり文献資料が中心になって、ものを見ていく。これが一点。 　それから、もうひとつは、時代区分をどうするかということがすごく大事な問題意識になる。近代という時代は何年から始まって、それにはどういう根拠があるのか、現代というのはどの時代まで遡って、どういう根拠があるのか。これは大きな歴史概論的な本を読んでも、時代区分はたいへん検討されているし、また具体的に「小平市史」においても、おそらく大門先生と大石先生は巻の境目をどこに置くかということを十分に話し合われると思うが、民俗というのは、そこをある意味では流動的というか、いい加減というか、時代を越えて受け継がれるものというような形で何が掬えるか――本当は、これは歴史学からいうと若干矛盾があるかもしれないという視点を持つ。社会構造が変わったら、同じものが存在しても、違う座り方をしている訳で、全く同じではないというのが歴史学。民俗の場合は、そこを相対的に緩くすることで、どんな問題が取り上げられるかという、基本がそういうところにひとつある。 　ふつう、民俗調査の方法は、今から遡っていって、生活の原型を探る、そういう視点があるが、小平の場合、先ほど大門先生の話にもあったが、私が話を伺った小平のお年寄りの方で一番年長の方は大正６年生まれ、次いで８年生まれの方、もう 80 代後半から 90 歳にかかる方に話を伺って、「今まで生きてこられた中で、いちばん小平の変化が激しかったのはいつですか」と尋ねると、だいたい昭和 30 年代の後半以降というふうに異口同音に言われる。これは先ほど大門先生が言ったことと重なるが、昭和 34 年に、実は「小平町誌」が出ている。 　ほぼ半世紀たって、今、「小平市史」というものが作られているから、私たちにしても、この 50 年の変化というものはすごく大きいと、それをどうやって記述できるか、つまり今あるものを遡及して、古い生活原型を探るということだけではなくて、この 50 年の変化自体をどう捉えるかという、これは民俗学にとっては応用問題、たいへん厄介な問題になるが、それをこの３年間の調査で何かきちんとやらなければいけない。それで今たいへん試行錯誤している。これは言い換えると、この小平にとって「戦後とは何であるか」、「都市化というのはどういう意味を持っているのか」という問題と置き換えることができると思う。これはおそらく、視点の違う切り方で、大門先生も直面されている問題だと思うが、民俗の場合はもう少しこう融通無碍というか、輪郭がはっ

	きりしない形で模索した結果を出していこうと。 　この場合にひとつの軸となるのは、「人のつながり」だと思う。この 50 年の中で、小平市の中でどのように人のつながりが、あるものは消え、あるものは形を変え、あるものは新しく生まれてきたか。それがどんな意味を持つのか。集団とか地域というものは、その中に分裂性を潜めている。だから時代とか時代への対応力というものを持つわけだが、でも逆に分裂する思いというのは片一方で新しいつながりを求めようということの裏返しだから、それがこの 50 年間、小平という地域の中で、古いものをベースにしてどのように発展して、展開してきたか、それを民俗という立場でどう掬えるか、というのが直面している問題になる。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	ひと通りそれぞれのイメージを語った。市史編さんの過程で、私たちもずいぶん議論し、大方の合意を得ながら市史の議論を進めている。
市長	私は、小平市に住んで 30 年くらいしか経っていない。小平市になって 50 年経ち、市長は私で 5 代目だが、5 人の市長のうち 4 人はいずれも小平で生まれていない。こういう市は珍しい。古い土地柄というものは、私は元々新潟から出てきたが、新潟あたりでは、他市や他県から来た人がその地域のトップになるというようなことは考えられない話である。小平市というのは、新しいものに対して非常に寛容に受け入れてきたという歴史があり、これがまさに小平市の今日の姿であると思う。 　しかし、新しいものが古いものを否定しているわけでもない。これも私のことで申し訳ないが、私は新潟の農家の生まれなので、新しいものを求めて東京に出て来ながら、どこかで自分の生まれ育った地方のようなものを求め、小平市の大多数の市外から移り住んできた人たちは、そういう非常に複雑な思いで生活している。 　今日の午前中は、農家の方が農家でない人たちを農業指導しているところを見てきて、100 人以上来ていたかと思うが、大半はサラリーマンを終えて、今、悠々自適の人である。定年退職後、どういう生活をするかというと、大半の人たちは農業である。職業でいうと大企業の部長であるとか、本当にそれぞれ日本の近代化のまさに先兵として、身を粉にしてやってきた人たちが、ふと気づいてみたらそういうことをやっている。 　中央線沿線は、古いものを駆逐して、ひたすら新しいものを追い求めているようなところがあるように私には見えるが、西武線沿線というのは、幸か不幸か、そういった中央線沿線のような開発のスピードが遅れた分だけ、そのスピードが緩い分だけ、ある一定の余裕があるというか、あまり開発していくのも

	どうかな、というところは、皆、疑問を持ちながら生きているようなところがある。 　そういう意味で、中央線沿線のようなまちを目指すのではなく、そういうまちとは違う今後の都市化の歩みを、やはり過去の例をならって、我々が生きていくときに、豊かさとは何かというようなことがしっかりと我々の中で落とし込めて、新たな 50 年が築けるようなものができれば、というような思いがある。都市基盤などはしっかり整備はするが、何かこう、中央資本みたいなものをどんどん誘致して開発していくというのはどうなのかな、という思いでいる。市制施行 50 周年を機会にして、小平市が目指すべき方向性として、そういうことをうまく表現できれば、という思いでいる。 　そういう意味では、市史編さんは非常にためになるというか、そういうものをしっかり検証しておくことが必要で、反省すべき点も相当あるのだと思う。 　人口急増を、ただただ受け入れてきただけというところは三多摩地域に共通していると思うが、都市のいわば成長管理というか、ある程度、例えば今は人口は 18 万だが、18 万くらいでいいよ、と、これ以上人口を増やさないような何か手立てをするとか、もっと違うものに力を入れてはどうか。どこの市町村に行っても、「うちの市の人口は、これくらいいます」と言って、人口規模でなにか優劣を争っているようなところがある。合併問題もそうで、地方の市長に聞くと「今度うちは合併して 20 万人になった」とか「50 万になった」とか言いながら、実際は過疎地域を抱えている。本当の豊かさは、人口ではないのではないかという気がする。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	大分しっかりしたビジョンをお持ちである。小平モデルというか小平スタイルを今後つくっていく作業を、ぜひ一緒にやっていきたいと思う。ただ、今聞いて思ったのは、たぶん小平も、中央線がまだない江戸時代には、中央線型のような行け行けドンドンの量的拡大が、他の国分寺村や小金井村と同じように展開していた時代があったように思う。私から見ると、江戸というのはそれぞれが競い合いながら新田をどんどん拡大していく、多摩という個性はあるが、小平という個性はまだ見つけにくいような時期でもある。 　もしそこで、小平スタイル、小平モデルに向かう土壌が出来たとすると、きっと江戸以降、市長が言う中央線型と西武線型とを仮に類型化したときの、西武線型の、伝統と調和しながら発展していくようなスタイルは、やはり近現代になるのかなと思う。
大門ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	西武線型というのは面白い。中央線型と西武線型で、なんとなく違いは分かる。小平は、駅はすごくたくさんあるが、大きい中心的な駅があるわけではな

	く、中央線に出ようと思うとちょっと遠いとかいうようなことも、今市長が言われたような背景にはあるのかなと思う。 　近現代で見ると、開発の時期は大きく二つくらいあって、昭和の初期から戦時期にかけた時期は、箱根土地株式会社などが関係していて、戦時期も軍事施設などがたくさん来る。それから、さっき話に出た戦後の 1960 年代、昭和 30 年代の郊外化の時期、この２つの時期に、すごく大きく、開発も含めて小平は変化をしてきたと思う。 　今の西武線型とちょっと関係するように思うが､2 回目の戦後の開発の時に、小平の中に団地がたくさん出来る。先ほど言ったような近現代の問題に関して、団地についてもいろいろ調査をしているところである。 　私もいっとき団地に住んでいて、住宅・都市整備公団といわれる頃の賃貸に住んでいた。その後、現在、日野市に住んでいるが、家を買って、団地を出て持ち家に住んでいる。市長もおそらく持ち家ではないかと思うが、日本人の人生設計は、最後には家を買って住むというのが、今でもまだ続いている生活スタイルになっていると思う。 　小平の中には団地がたくさんあって、しっかりした暮らしを、団地の中でやっているように思う。例えば小平団地は賃貸であり、賃貸から出て行く人もいるが、入居率が非常に高くて、賃貸で住み続けるという人たちが非常にたくさんいる。賃貸で、小平という西武線型の地域で、助け合って暮らしていくということが、小平団地では非常に強い。 　このあいだもちょうど、ＮＨＫの「クローズアップ現代」でやっていたが、コレクティブハウス、シェアハウスといって、複数の家族が集まって、リビングは共通で、というような家の形が注目されているが、賃貸の小平団地はまさにシェアハウス、コレクティブハウスである。共通に助け合うという部分がすごく多く、それとそれぞれの生活領域があって、さらにその背後に小平という西武線型の地域がある。私は、ここに未来があるのではないかな、というふうに思う。 　さっき言ったように、私自身も持ち家に住んでおり、賃貸よりも分譲の方がめざすべき住まいという考え方も強いが、小平の中にある賃貸の住み方は、新しい暮らし方を示しているのではないかと思う。そして賃貸の生活を支え合っていることの背後に、きっと今市長が言われた西武線型というか、開発一辺倒ではない小平の特徴が関連しているのではないか。昔から残るものと、新しく昭和 30 年代、1960 年代に入ってきたものが、どこかで接点を持って、それで今の小平ができていると思う。小平団地は、その非常によい例、未来を指し示す例だと私は思っているが、そういうような接点の部分をぜひ小平市史では明らかにしたいと思う。小平的な、開発もあったけれども両方で組み合わせてや

	っている、というものを、輪郭を描きたい、とそんなことを考えている。
香月ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	たぶん、都市と農村というのは、もう対立概念ではなくなって半世紀以上経っていると思う。農村の中にどんどん「都市」が入っているし、都市の住民の中でもある意味では農村回帰みたいなところもあるし、疑似農村的な共同体に支えられているような部分もあるので、同じ問題を右と左から向き合っている、若しくは同じ問題を本当は共有している。こういう江戸近郊の地域では、江戸のまちは近郊農村を絶えずその都市の中に組み込んでいく過程を繰り返しているから、もっと早い時代から、小平は都市へのアンテナというのを磨いていたかもしれない。 今の市長のお話を聞いていて、ふと思ったのは、実は私は、高知県の四万十川条例の四万十川流域保全振興委員をやっていて、一昨日その会議があり帰ってきたところなので、基本的には同じ問題ではないかな、と。実はその四万十川の自然景観を守るということで、地元の人たちと 20 人くらいの会でやったときに、意見がはっきり分かれて、四万十川を利用した開発とは何かというと、ある人は、税収入の増加と雇用人口の増加じゃないかと言う。もうひとつの意見は、観光客に来てもらわなくてよい、あんまりきれいなポスターを出すなと、たくさん来られたら自分たちが潰れると。自分たちの暮らしの軸がボロボロになるから、ちょっと観光ポスターを出して、どうしても来たいという人だけは気持ちよく迎えるということでないと、自分たち自体の再生力がなくなると。 その意見、やりとりを聞いていて、そういうせめぎ合いがすごく健全に行われることの中で、いろんな具体的なものを解決していく力が生まれるように思った。細かなひとつひとつを、どちらかのポリシーを決めてこれでやるということではなくて、どちらかを潰すのではなくて、両方の意見を摺り合わせていく上でいろいろな解決策が出てくる問題があって、おそらく中央線型と私鉄線型というのはまっこうから相反するものではない。おそらく双方のベクトルはいろいろな地域の中にあると思うので、それをどんなふうに健全にせめぎ合って具体的なものを乗り越えていくかということになると、じゃあ地域の意思ってなんだろう、ということになる。たぶんこれは民俗のことも考えなければいけないけれども、その問題に最終的に辿り着くように思う。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	市長の問題提起の、中央線型と西武線型が衝撃を与えているが、確かに中央線は都心直結型だから、ダイレクトに都心に結びつくし、それからそういう意味では西武線はクッションが入る。 このあいだ山口に行ったが、山口県は県単位の新聞の地方紙がないそうである。他は、高知新聞、福井新聞など県単位の地方紙があるが、山口には広島と

	か九州の新聞が進出している。逆にどういうことかというと、彼らの自慢は総理大臣を多く出したことであって、今、むしろ地域は深刻だということである。昔から中央の政治を支える、東京の政治を動かしているのは山口だと。東京へどんどん人材を派遣していたために、中央情報に敏感で地方新聞が育たないと言われていると、ひとつ、それはあるかもしれない。 　もし中央線型、それが同じような話であるとすれば、中央とダイレクトに結びつくことは、もちろん意義と便利さはあると思うが、一方で自らの足元の地域を自分の目で見なくなってしまう恐れがあるのかもしれない。たぶん、そこのバランスをこれからとっていく必要があるのだろうと。それは、どのような地域でも同じだろうと。 　そういう意味では、小平は、大門先生が言われるように、意外と今のところバランスよくよいポジションにいるのだと思う。ならば、もう一回それを歴史的に私たちが確認していくことも大切で、それは今回の市史にひとつ意味のあることかな、と思う。 　それでもうひとつ、今回は 50 周年ということで自治体史の仕事が始まったわけだが、もう先生方もご存知だが、実は自治体史ブームというのは終わってしまっている。多摩地域もみんな終わっていて、多摩で今進めているところは、ここ小平市と八王子市だけで、八王子も私たちを意識し、私たちも八王子を意識しているところもある。 　今、最後にスタートして、今までの自治体史と一味違うものを目指したい。やっぱり最後になるのか、平成の大合併で 3,000 の自治体が 1,000 いくつになってきており、あるいはそこで改めてもう一回自治体史ブームが来るかもしれない。新しい基礎自治体が新しい歴史を振り返るという、そういう可能性もある。ひょっとして小平は最後ではなくて、最初かもしれない。あるいはその繋ぎになるかもしれない。そう考えたときに、小平市史編さんの意義がもうひとつ存在するような気もする。 　私はよくいろいろなところで、小平で市史編さんが動いているんだってねと言われることが多い。だから逆に言うと、他の自治体も、もう終わったから終わり、とさっぱりしているのではなくて、やっぱりどういうものを作るんだろうと気になっているのだと思う。自分たちだってもう一回見直さなくてはいけない、そういう雰囲気は間違いなくある。歴史は絶えず振り返られるものだから、そのときに小平がひとつのスタンダード、基準を出せれば、他の市にもまた市史を作ろうじゃないか、という気運が高まると思う。それは非常に晴れがましいことだし、喜ばしいことだと思う。だから、位置はしんがりにありながら、追随するのではない、新しい、まさに小平スタイル、モデルを発信していく、そんな勢いで私自身も関わっている。その辺の市史編さんのあり方みたい

	なものを、思うところをお伺いできたらと思う。
大門ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	20 年くらい前のこと、西東京市ができる前に、田無市の市史編さんを手伝ったことがあるが、そのときは、全体の編さん方針が、各時代の暮らしというものに焦点を合わせて、田無の人々がどういう暮らしをしてきたのかというところから、歴史を明らかにしようという市史だった。 当時としては、自治体史で「暮らし」という視点を前面に出すのはかなり新しい視点で、それまでの自治体史は行政が中心に書かれる、そういう傾向が強かったところを、人々の暮らしというところに焦点を合わせるという点で、私は今でも長持ちする斬新な市史になっているのではないかと思っている。それから 20 年経ったときに、たまたま小平市史に声をかけていただいて、小平市史に取り組むことになった。 先ほども言ったように、市民生活という点で継続して考えたい、と思っているが、20 年前と全く同じということではちょっと新鮮味が足りない、あるいは田無ではなくて小平に即したときに、どういう地域的な特徴を浮き彫りにしたらいいんだろうか、ということを考えている。これは先ほどからの話の繰り返しでもあるが、私は、小平は一見すると大きな特色がないようでいて、実はそうではなくて、教育とか福祉を通じて、地域内、地域外の人の交流が非常に活発なところだな、と思っている。私自身も、大学の 1 年生と 2 年生の 2 年間は小平に通って来ていた。自分の人生のうちの何年間を小平に通ったとかいうような人は、小平以外の地域にもたくさんいるはずで、特別支援学校も同じだと思うし、いろいろある病院なども同じだと思う。 このあいだ静岡県のある自治体史を読んでみたら、市の行政にかなり限定されたような書き方になっている。市役所の歴史というか市の行政の歴史というか、それはもうちょっとしばらく前の見方のような気がする。 小平の場合は、古くからいる人たちと新しく来た人の交流もあるし、近隣に住んでいる人たちが小平に通学する、通園する、通院するという形で小平と接点を持っている人たちは、内外にたくさんいる地域ではないかと思う。そういった、人の接点を明らかにできるとよいと思う。思っている以上に、実は多くの人が接点を持っている場所、つまり開かれた場所ではないか。表面的にはそういうふうに見えていないかもしれないけれども、私はこの間調査をしていて、そういう印象を強く持っているので、自治体史の編さんにもそうした視点をぜひ入れて、開かれた自治体史みたいなものをぜひ編さんしたいと思っている。それはちょっと今までと少し違う視点を入れた自治体史になるのではないか、それももしかしたら、小平の現在と将来を考える上でも、何かヒントを出すことができるかな、ということを考えている。

香月ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	実は今、民俗の中で一番大きな問題と、今、大門先生の言われたことと、微妙にどこかでクロスするが、小平の人口が 18 万人くらい、昔の新田村に住んでいた方、関係の方の人口はどのくらいかというと、おそらく 1 万人前後ではないかと思う。 生活文化を記述するときに、民俗の場合、先ほど言ったように、あまり時代的な線引きはやらないので、今の小平の生活文化を考えるときに、かつての新田村にいた系列の人たちの暮らしだけを記述して、それで小平市史の民俗ということでまとめてよいかどうか、という問題がある。それ以外の 17 万人ぐらいの方の生活がどんなものかという目配りが、その中にほとんどないというのは不自然。これは 2、30 年前だったらそういう自治体史でもやむを得ないという形で通ったのだが、先ほど言ったように、都市化とは何なのか、戦後というのはこの土地にどんな意味を持ったのかということになると、そういう新しく住みついた方、よくあの武蔵野地域の役場の方と話すと、もとからの村にいた人を旧住人と言って、新しい人を新住民みたいな言い方をされているけれども、新しく住みついた方が圧倒的に多い地域の自治体の場合、民俗の場合は、古いものだけを掬っていればよいのかということが実はある。 でも片方で、こういう自治体史をやったり、博物館の手伝いをしたりした経験から言うと、新しく住みついた方がその地の歴史を知りたいなと思うときに、自分の住んでいるマンションの雑木林がどんなふうに切り払われて、自分の住んでいるマンションがどんなふうに建って、その中でどんな生活が行われているというようなことではない歴史を求められている。だからある意味では、歴史認識というのが、新しく来た方のほうがより関心を持っている。古くから住んでいる方は博物館といってもあんまり逆に興味を示さない、地域に博物館を造ってほしい、郷土講座をやってほしいというのは、どちらかというと新しく住みついた方である。でもそれは自分たちの暮らしそのものではなくて、自分たちが住み着く前の地域の歴史を知りたいというのがある。だから、そこには重点を置かなければいけない。 でもその片方で、新しく住みついた 17 万人くらいの方のことを全く目配りなく書いてよいのかどうか、これはその市域の対象をどう捉えて、自治体史の中で記録していくかという問題と実は重なるもので、ある意味では今の時代に自治体史を作る一つの試みを試されている。それが実は一番大きな問題になる。古いものはこうですよ、ではなくて、今こうで、その中にどんなものが新しくなって、どんなものが受け継がれてきて、変化は何なのかということを、17 万人、18 万人という中で把握できるかどうか。そんなに見事にできるかどうか分からないが、現代の自治体史は、少なくとも都市近郊、東京でいうと、

	新宿から青梅くらいまで、基本的にずっと開拓新田村で、いくつかの村が住宅化されて 10 万人以上の市になっているというところだから、基本的に全部この地域はそうした問題に直面していると思う。そこを、パイオニア的な形で試行錯誤しなければいけないと、これは結構しんどい問題ではあると思う。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	市長のほうから、自治体史ができるまでの経緯や、あるいは議会でも取り上げられることなど、そういうものも含めて、市長の自治体史に関わる思いなど、もしあれば。
市長	今、先生が面白いことを言われたが、意外と古くから小平市におられる人は、そんなものいいよ、みたいなところがある。かえって私のように地方から出てきた人のほうが、逆に市史編さんについては、割と期待をしていると思う。 私もそうだが、大半がそうだと思うが、小平市に住みたい、小平市に絞って住んだというよりは、結婚して家を持たなくてはいけないからといって、自分の懐都合も合わせて、たぶん住んだのだと思う。しかしその時は、すんなりと会社との往復だけで、そんなにそのことは考えなかったのだと思う。ローンの返済に追われ、子どもの教育に追われ、ふと気づいてみると、やはりいろいろ考えるのではないだろうか。 面白い話があって、あるところにマンションができると、ものすごい反対運動が起きる。前から戸建てに住んでいる人たちは、マンションができると当然嫌がる。そのマンションの隣にまたマンションができると、前にできたマンションの人たちが反対運動をする。根っこのところは、みんな自然で、もっとゆったりとした生活を送りたいというのがあるんだろうと思う。ある種、新しく移り住んだ人たちが歴史をひも解いて、もっと言えば、自分が住んでいるところはいったい昔はどうだったのかとか、ひょっとしたら自分は破壊者の一人だったのかなということもあるんじゃないかと思う。古くからいる人たちは、もうそれをずっとつぶさに見ているわけで、先祖伝来の土地を売って、それこそこの 2、30 年、大きな生活の変化があった。
香月ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	それは、新しい郷土意識に発展していく可能性があるように思う。先ほど、懐具合を含めて小平に住んだというふうに言われたが、言い方を変えれば、縁があったということである。そんな必然性ばかりで展開しているわけではないから、縁があった方たちがこの地域のことを知ろうという時に、こういう自治体史でお手伝いできれば、新しい郷土意識そのものではないにしても、それを育むひとつの力、中継ぎする媒介のひとつにはなるような気はする。

市長	市史編さんも、市民の皆さんの参加を積極的に取り入れているというのは、本当によい試みだと思う。郷土意識を育むという意味では、両方の人たちがテーブルに着いて、歴史についていろいろ検証してみる。 自治体史というと、だいたいみんな行政史、役所の歴史で行政に関わるものが多いが、民俗史・自然史というものはだいたい人の生活なので、そういうところが、どちらかというとこれからの自治体史は、そういう方にシフトしていくのではないか。 三多摩地域もあと数年すれば人口減少社会になって、住宅なども過剰になって余ってきて、また別の意味での歴史の変遷を辿っていくのではないか。地域の崩壊と同時にコミュニティはもちろん崩壊していくし、そうした時に、自治体史は、またたぶん全く違った視点で書くようになるのではないか。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	多摩ニュータウンなどは深刻ですね。
市長	そうでしょうね。たぶん昔、小平団地などもできたころは、テレビの宣伝ではないが、団地に住むといったら本当に夢のまた夢で、冷蔵庫とテレビと洗濯機があって、文化住宅と言った。ところが小平団地も随分古くなって、しかし、先ほどおっしゃられたように、あそこは非常に不思議なのだが横のつながりがすごい。
大門ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	確かに建物は古くなっているが、人がみんなしっかり暮らしている感じを受ける。
市長	あそこは、お年寄りで5階に住んでいる人たちが買い物に行けないということで、近所の人たちが、「買い物に行くけど、何か買ってくる？」と言ってやっている。彼らの中で見守りのグループもあり、お年寄りの安否確認をしていて、まさに自治機能がある。それはかなり差し迫って、彼ら自身の日々の生活のために自衛的にやっている。
大門ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	多摩ニュータウンなどは、最近1960年代くらいにできた団地が高齢化して、団地自体の機能がうまくいかなくなっているということが言われているが、それと小平団地は随分違う。小平の中で、自治的な機能を含めて新しく40年くらいの間に作ってきたものがあるわけで、かつてからあったつながり、先ほど香月先生が言ったように、つながりがどういうふうに変化をして、また新たに生み出されようとしているのか、というところをしっかり見たいな、と。そこのところでは、私は、小平はいろいろと見るべきものがあるのではないか、と

	いう感じがする。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	新しい共同性みたいなものは、やはり先ほどの中央線型ではないけれども、マンションで世間と隔絶されることが自分の快楽、という世界からは生まれてこない。だから、そこはもう一回価値を見つめ直す必要がある。 大門先生の言う開かれた自治体、香月先生の言う 18 万人規模の自治体史をどのように作っていくのか、専門集団が部屋にこもって作るのではなくて、市史編さん室がいろいろと情報を発信するスタイルが大切だ。市報をはじめ、朝日新聞、読売新聞、東京新聞、産経新聞など、いろいろなところで市史の動きを追いかけてくれている。さっき言ったように最後だけに、逆に注目されている部分があるのだろうけれども、やはり何をやっているのか、一体地域をどのように考えるのか、いろいろな期待なり注目なりがある。そういう意味では、しっかりと市民に発信していく必要があり、市民の方々とも情報交換していく必要があると思う。 自治体史としては、やはり５０年前の「小平町誌」が評判が高くて、ある意味私たちにはプレッシャーでもある。今でも名作というと変な言い方だが、その乗り越え方のひとつとして、このあいだ市史編さんの近世部会では、中味の文章だけでなく、目次の表題やタイトルを読みやすくしようと。私も、稲城市史や台東区史に携わったが、一般的には近世村落の成立とか近世村落の構造とか展開とか解体とかいう表題をつけながらやる。 今回は、このあいだの近世部会で議論が出たのは、例えば「村ができる」というような表題をポンとその章に出して、「開かれる小川村」とか「支配する人たち」とか、あるいは次の章で「村を知る」。「村ができる」は 17 世紀、「村を知る」は 18 世紀・19 世紀を表現する。その内容は、「村をまとめる」では、村役人などの話が描かれて、年貢はどう納められるのかなど、市民に語り掛けるような感じのものにできないか、と議論が進んでいる。最後の章は「村が変わる」という題で、幕末維新を扱う。 こうして、叙述スタイルも含めて、今までのお堅い自治体史というのとちょっと違う線を、今日このあと開かれる市史編さん委員会で提案する予定だが、少し模索してみたいと思っている。開かれた、あるいは市民全員に読んでもらえるような新しいスタイルの市史を、それは市長に期待してもらってよいかなと思う。
大門ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	市史編さんの資料調査の過程で、市内のいろいろなところを回らせてもらって、お話を聞いている。例えば特別支援学校に伺って調査させてもらったことがある。非常に快く迎えてくれた。都の特別支援学校に小平市史で調査に行く

	というので、最初はちょっと意外な感じもあったようだが、いや実はそうではなくて市と関わった教育機関だけを調査するのではないです、と。先ほど来言ってきているような、こちらの視点を説明したら、よく理解していただいて、市史への期待を非常に強く持ってくれた。調査の過程自体が、市史への期待とか、小平の中にあるけれども市とは直接つながっていないような機関の人たちと小平市をつなげるような役割も、ちょっとは果たしているのかなと。 市史を作ること自体が、地域の中に今までと違うつながりができて、それがまた市史に反映するというふうに、うまくつながっていくとよいと思っていて、全体としては期待を非常に感じているので、大石先生の言われた叙述も含めて、読みやすくてなおかつそこに、通学するような人たちにも届く、そういう市史を作りたいと思う。
香月ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	大石先生が言われた「小平町誌」は、私たちの分野にとっても大変なプレッシャーになっていて、ユニークでメリハリが利いている。 町誌の民俗編にはお祭りの記述がほとんどなく、こういう民俗編を出したのは、あの時代にはない。だから「小平町誌」の中で民俗の部分は、あの時代に民俗学会はほとんどコメントしなかった。でもあの時代に、文化人類学の 20 代半ばの研究者の方々がここで思い切り試行錯誤をやって、新しい自治体史を作ろう、という息吹は、今読んでもはっきり伝わる。 だから、何と言うか、ミスがなくて一応一通り揃っている形の全体像というのもこういう自治体史では必要だけれども、私たちは 4、5 人でチームを組んでいるが、そのチームの個性が反映する形で、どうやって後に残す構成内容ができるか。あれだけユニークな町誌を出したその後、50 年後に書く自治体史というのは、大変これはしんどい仕事である。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	本当は、ライバルは八王子市史ではなくて、「小平町誌」のような気がする。
香月ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	その時代に 20 代半ばで「小平町誌」に携わった川田順造先生という、この方はもう大人類学者だが、あの方にこのあいだ話を聞きに行ったら、本当に、新しいものを作ろうという心意気だけで、小平に通って泊り込んで、という話をされていた。たぶんそういったものは、後の時代まで届くのだと思う。それをこちらが今の時代の時代性を取り込んで息吹として育てるか、これはこんなことをここで言ってもそう自信はない。やっと３年のうち１年半が終わって、これは大変な仕事だな、と実感している最中である。
市長	町誌があれだけ優れているのだから、その後の付け加え程度でいいではない

	かと言う人はいる。あれだけきちんと書いているのだから、もうあれ以上のものは書けないんだから、もういいじゃないか、と言う人もいる。ああいう大作があっただけに、皆さんにとってもプレッシャーだろうけれども、逆に言うとあれがあるからいいじゃないかと言う。あとはその後の50年を――50年なんて、歴史的には記録もいっぱいあるから、そんなに大変な作業ではないじゃないかと。そういうことから言えば、こんな財政が厳しい折に、そんなにお金をかける必要はないじゃないかということになる。 　我々は、それを超えた必要性を言ってはいるが、ただ、先生方のお話を伺ってもやはり、先生方の中でもかなりプレッシャーを感じて、やはり非常に大変だということで、それだけにいろいろ議論もある。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	最後に、今後の活動の方向性を含めて、それぞれ意見を出していただければと思う。 　私が勤めている東京学芸大学の学生も、小平はとても住みやすいと言い、たくさん住んでいる。先ほど大門先生が言われたように、住んで出て行く人というのがやはり、小平の一つのエネルギーになっていると思う。その学生たちには、市の図書館が非常に使いやすいという高い評価がある。それは彼らが歴史を勉強しているので、古文書室で古文書を見る体制が整っているだけでなく、専門書、一般書を含め、図書館自体が使いやすくて、本もよく揃っていて、勉強するのによい場所だと思う。 　その上で、先ほど小平市の図書館の古文書は、都内最大級の資料と言ったが、この史料保存に外部の評価が高いのは、丁寧にみんな複写してあり、古文書本体を傷めることがなく、自由に閲覧・複写できるシステムをとっている。必要なときはもちろん本物の史料を見ることができるが、ふだんは史料を傷めることなく、いつでも幅広くサービスされている、これはとても評判だし、真似するところも出てきている。 　そういう意味では、製本する費用とか写真を撮る費用とか大変だが、長い目で見るとやはりこれがよいやり方だろうと思う。このようにサービスのレベルが高いので、図書館にしても、市史編さん室にしても、古文書室にしても、人が集まってくる場になっていて、生涯学習センターというか教育センター機能を持っている。 　このような場を、今後は市史編さんで――やがてもう2年3年で終わってしまうわけだが、その後を行政、市長のほうが見通していただいて、その先の将来像を、資料の保存のあり方、公開のあり方、サービスのあり方、それを前向きにお伺いできたら、と思う。 　これは市史編さんの最後の段階でご相談することになるが、今までの古文書

	整理・保存・利用の実績があって、先進市との指摘もある。そういう財産をさらにいかに発展させていくかということが、今後の重要な課題になると思う。
大門ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	今、大石先生が言われたのと同じような保存ということで、ぜひ私も将来的な要望にしたいと思う。ここの図書館は、近世が古文書類を含めた家文書、個人文書の収集をかなりしっかりやったのに対して、近現代のところは基本的には文献をかなり丁寧に集めてくれた。だから近現代の調査をやるときも、文献類についてはかなりここで見ることができる。 私たちが今やっているのは、本になっているようなものではなくて、先ほど言ったＰＴＡの関係とか、いろいろな機関で出していた会報とかという、どこかのところでまとめて持っているようなものではない、だけど市民生活に関わるような資料をかなり膨大に集めている。 近現代については、今まで図書館等で史料集を出していなかったので、この市史編さんの過程で、史料集を全部で５冊出す予定でいる。最初の２冊は昨年度出ていて、議会議事録を全部まとめて出した。今年度２冊出す予定になっていて、１冊は新聞の多摩版などを使って、小平関係の記事を、昭和の初期から1960 年くらいまで集めたものにする。これはでき上がったらぜひご覧になって欲しいが、大変手間暇をかけて、すごくよいものができた。普通は年ごとに、とりあえず資料をたくさん載せるやり方をするのだが、担当者が丹念に読み込んで、各時代ごとにテーマに即してまとめてみた。人と自然というところから始まる。これは、私はなかなかよいなと。 各時代ごとに、自然の様子、生業とかがどういう変化をしているのか。そこからもちろん学校の話などもある。これらの原資料を最終的には図書館等で、市民の人も見られると非常によいと思う。 それからもう１冊の史料集は、新聞史料のあとの時期の小平市の市民生活に関わる様々な史料を、第４集として出す。ここのところもたくさんの資料を集めているので、最終的には、市民の人が現物の資料を見られるような形で、使えるようになるとよいと思う。小平市の図書館は、今までは近世の家文書で非常に特色ある伝統を持っているわけだが、それに続いて近現代のところでも、自治体史の編さんをやらなければ、なかなか集められない史料が加わると、充実した機能を発揮できると思う。 先の話だが、近現代についても、保存、公開、ここのところにぜひつなげて役立てていただければいいのではないかと思う。
香月ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	民俗資料に関しては、民具を入れて保存されている建物があるが、なんとなく置き方、整理の仕方が、ポリシーが見えてこないように思う。決してたくさ

	んお金をかけて大きなものをつくる必要はないが、あそこを担当されている職員が頑張ってくださっているというのは、建物の中に入ったら分かるが、もう少し見学しやすく、小学生にも分かりやすく、ひとつ欲を言うともう５割くらいは場所を広げて欲しい。 まだ収集できる民俗資料はたくさんあって、これはもう 5、6 年したら出来なくなると思われ、今がもう最後の時期なので、せめてこの 4、5 年でも多少手間を割いて、置く場所をつくっていただければ、昔の唐箕（とうみ）とか青梅街道沿いのお茶屋さんの古い茶箱とか、いくらでも調査したらあるので、今が最後の時期ではないか、という気がする。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	小平アーカイブズ構想みたいなものをぜひ立ち上げていただいて、地域博物館とか地域資料館とか、どういう形になるか分からないけれども、今回の市史の採算というか、成果を活かしていただければ、と思う。
市長	自治体史を作ることについても、意義を理解してもらうということはなかなか大変なことで、それだけにまさに先生方が言われたように、開かれた、多くの皆さんが目にし、手にとってもらい、理解してもらって、それで小平市に住んでいることについての意義のようなものをそれぞれ感じてもらって、将来に向けた自分たちの生き方の選択のようなこともまた含めて考えてもらう機会になればというふうに思う。 広く、皆さんに読んでもらえるようなもの、それには多くの皆さんに編集過程に関わってもらうということだろう。人間は、関わりのないものについては関心を持たない。特に民俗などは、やはりいろいろな人に関わってもらって、この前、東小川橋自治会の 40 年誌だったか、その東小川橋の歴史をちゃんと載せて、いろいろ 40 年の自治会で取り組んできた事業も、関係するものを載せていた。
大門ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	あそこの自治会は、機関紙を見せてもらったが、しっかりしている。
市長	当初、街灯をつくるとか、道路の砂利道を直すとか、今は高齢者問題で、いろいろと時代とともに役割が変わっていく。 まさにああいうことで、行政史ではなくて、市民の生活史みたいなところを、しっかりと捉えていくということが大事なのではないか。むしろ、これからの自治体史はそういうことなのではないか。できるだけいろいろな人を巻き込んでいってもらえれば、ということをお願いしたい。

（文責：事務局）

平成22年度第2回小平市市政アドバイザー会議要旨

開催日時	平成22年12月9日（木）15時00分から16時30分まで
開催場所	小平市役所6階大会議室
出席者	小林　正則　市長 今井 美代子　アドバイザー（小平市文化財保護審議会委員、小平郷土研究会副会長） 大石　学　アドバイザー（小平市市史編さん委員会委員長、東京学芸大学教授） 立川　鉄六　アドバイザー（小平郷土研究会会長、外務省参与） （事務局）伊藤企画政策部長、有川政策課長、篠宮政策課長補佐、細村主査 （傍聴者2名）
会議次第	1.開会 2.市長あいさつ 3.アドバイザーからの問題提起、意見交換 4.閉会
市長	小平市では、市政全般について、幅広い知識と経験を有するアドバイザーの方に、専門的な立場から直接、問題提起や提言をいただくため、平成１９年度から市政アドバイザー会議を設置している。 今年度の市政アドバイザー会議のテーマは、「小平の歴史を通して、小平市の未来を展望する」とした。小平市は、平成24年に市制施行50周年を迎える。まもなく訪れる50年を節目に、小平の歴史をあらためて見つめ直し、現状を再認識するとともに、今後の市政運営の取り組みにどう活かしていくかを考えていきたい。 先日行った第１回の会議では、市史編さん委員の３名の皆さんから、行政の歴史だけではなく、市民の目線で見た新たな形での市史編さんに取り組み、市史編さんの小平モデルの発信を目指していきたいという、お話をいただいた。 今回は、市民の方々による郷土研究の視点から、これからの小平市を考えていきたいと思う。 アドバイザーとして、小平市文化財保護審議会委員で小平郷土研究会副会長の今井美代子アドバイザー、小平郷土研究会会長で外務省参与の立川鉄六アドバイザー、本日の会議のコーディネーターとして、小平市市史編さん委員会委員長で東京学芸大学教授の大石学アドバイザーをお迎えし、会議を進めていきたい。 アドバイザーの皆様には、行政とは違った視点からの問題提起や、斬新な助言、示唆などをいただきたい。アドバイザーの皆様相互の闊達なご議論などもいただければと思う。

大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	司会を務めさせていただく。 それぞれ簡単に自己紹介と、今までの活動等をお話いただければと思う。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	歴史の研究者でも何でもない主婦の立場から、市民となって 50 年ということで、どんなふうに今まできたかということ、お世話になったことを交えながら簡単にお話したい。 私は、1960 年（昭和 35 年）に、小平町の学園東区（現在の小平市学園東町）に家を建てて引っ越してきた。畑の中の小さい家で、水道も設備はできていたが、家に通すまでには 1 週間ほどかかり、不便をした。風呂は石炭とまきで焚いた。買い物は、多摩湖線の学園の駅のところで、そういうところで生活を始めた。少々不便だったが、自然の中で子どもを育てられるということで、私は明るい見通しを持っていたことを覚えている。 昭和 37 年の市制施行の際には、長男をおぶって花自動車に旗を振った覚えがある。 生活上の不便さはあった。畑の真ん中に家を建てたので、道はぬかるみ、雪が降ったり、霜が降りたり、雨が降ると、本当に長靴を履かないと通れなかった。うちの前を通って帰る方に長靴を貸したりもした。都市ガスは昭和 41 年に入った。道路整備や下水道整備など、市の努力にはありがたく思っている。長男が小学生の時には、すごく子どもが多く、二部授業もあった。学校も、暑いため、プレハブの校舎によしずを張って、上から水を流して涼しくしていたことも覚えている。学校を造るのも、大変だったろうと思う。今は小学校もいっぱいできて、ありがたいと思っている。 二人の子どもを育てながら、少し子どもの手が離れたときに、地域に目を向けた。市の公民館で講座を見つけ、下の子を連れて文章講座に出て、連続講座で勉強をした。その後、児童文学講座を 2 回受け、本の大切さ、児童文学の楽しさなどを学んだ。今まで眠っていた知的好奇心が目覚め、学生の頃よりも一生懸命勉強し、それは誇りに思っている。
立川ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	私がかねてよりひそかに誇りに思っていることは、寺子屋のことである。小川村の開拓が始まったのは 1656 年というが、その 120 年ほど後の 1775 年には、寺子屋が始まっていた。この頃は、語弊があるかもしれないが、まだまだ食うや食わずの状態であったはずなのに、そんな中、子どもを寺子屋に通わせる、この心意気はなかなかのもので矜持（きょうじ）の高さを思う。村人もさりながら、この寺子屋を始めたのは私の先祖であり、あまり大声で話すと自慢話に聞こえるかもしれないのでなるべく小声で言っているが、村の誇りである。

	日本文学の研究者ドナルド・キーン氏によれば、海外で日本の書物が翻訳された最初の例は、1785 年に林子平が著した地誌「三国通覧図説」だという。シベリアに漂着した日本船に書物が積まれてあり、ロシア人が内容を尋ねると、船頭が読んで聞かせた。それがロシア語の翻訳書になったという。キーン氏は、武士でも学者でもない庶民が書物を読めたことに驚いている。 庶民の子どもに「読み、書き、そろばん」を教える寺子屋は、江戸の中期、農漁村にも広がった。後年、士族と平民の子弟を同じ教室で競わせた明治政府の学制も、寺子屋の下地なしには成立しなかったに違いない。教育が国家百年の大計であることは先代から揺るがない。市史に印して誇れることだと思う。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	私は東京学芸大学の卒業で、大学の卒業論文と修士論文で、江戸の周辺地域をフィールドに研究をした。小平地域はその時以来の付き合いである。八代将軍徳川吉宗の時代に、大岡越前守が、この地域を含めて武蔵野一帯で新田検地を行うが、小平はその検地帳がよく残っている。共同体的な入会地が国家・政府によって区分けされ、私的所有地が発生してくる。それを検地帳という台帳で表現するが、私的所有地になった段階で、土地が価値を持つ。土地を集める人、失う人と格差が起こり、新しい村の形が展開してくる。そういうダイナミックな部分が非常に興味深く、研究を続けてきた。 小平市の図書館では古文書がよく整理されている。かつては図書館の職員で臨時職員の方々と学芸大学の学生やＯＢでジョイントして、「文書（もんじょ）を読む会」を立ち上げ、市内の公民館などを借りて勉強をしたりして、長い付き合いをしている。 後ほど話を伺いたいが、小平郷土研究会の昔の資料により、秩父のほうから取り出した白土を、青梅街道を利用して運び、江戸のまちが出来上がってきたことが分かる。その資料集を郷土研究会で残していて、それらを利用させていただき、この時期のイメージを作ってきた。小平郷土研究会は、とても伝統のある貴重な会だと思う。日頃から敬意を持っている。
市長	私は 30 年ほど前に小平市に引っ越してきたので、市長を務めていても、自分はよそ者ではないか、受け入れられているのだろうかという心理的ハンディがあるが、その分小平市を愛する気持ちは強い。小平市で家庭を持ち、子育てもしており、市長という立場を超えても、非常に小平市が好きである。 古くからいる方は小平のことをあまり語らない。郷土史家など小平市の歴史を研究して記録にとどめている人は、意外と小平に後から移ってきた人が多い。玉川上水や経済の高度発展のイメージだけが伝わるが、厳しい生活をしていたこともあったと思う。

	人口 18 万人の大半は、生まれ故郷を別に持って、小平市に移り住んできている。市制施行 50 年の新たな一歩として、検証して歴史を明らかにし、共有していくことが大切であると思う。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	「外からの目」というのは、やはり大切である。江戸時代の研究においても、外国人が非常によく当時の日本のことを記録に残しているが、日本人は、当たり前と思っていて記録していない場合がある。それと同じように、小平市にずっと住んでいる人には当たり前すぎて、なかなか記録化されなかったり、言葉にされなかったりすることもあるだろう。外からの目も、内からの目も、市の発展には必要だと思う。 先ほど少し紹介したが、立川アドバイザーが会長、今井アドバイザーが副会長を務められている小平郷土研究会は、大変伝統がある会だが、今までどんな活動をして、どんな成果があって、今後どうしていきたいかというあたりについて、お話いただければ。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	先ほどの続きとなるが、公民館の講座に参加する中で、小平はいったいどんな歴史があるところなのかという疑問が生じて、今度は小平の歴史への興味が湧いて、小平の昔の話を聞こうという講座を受けた。そして、昔の方たちの話を聞いて回って、採話集として本を作った。「お祭りや年中行事のときしか、お米は食べられなかった」など、日常生活の中での昔話をいっぱい聞き、民話の会でまとめたりした。 そういう中で、私が郷土研究会に入ったのはそんなに古くはないが、先日、郷土研究会で 125 回目となる博物館めぐりとして、千葉県佐原市に行った。小平と佐原はどういう関係にあるかと考えると、佐原は水郷地帯を埋めて水田にし、米を江戸に運ぶことで豊かになったと思う。小平はやはり江戸に近く、野菜などを提供する地域であったということで、似ていると解釈した。 郷土研究会は、「小平町誌」を編さんする基礎になったもので、その頃の会員はもう誰もいないので分からないが、小平を知ろうという意味においては、私も町誌を何度も読み返したりした覚えがあり、市長と同様に、小平市を愛していることについては、ひけをとらない。ここは自分の子どもたちのふるさとでもあるし、いっぱいいる小平の子どもたちのふるさとになるだろうと思っているので、大事にしたいと思う。 また私は、郷土研究会の活動とは別に、市制施行 20 周年のときには、「郷土かるた」を作ることにも参画した。小学校やふるさと村、子ども文庫などで、小平の昔のことを話すときに、かるたを読んだりして、かるたの普及活動もしている。私が小平に越してきた 50 年前は、2 階家は近所に 2 軒しかなかった

	といっても、2階家ということ自身が分からない実情がある。そういうことも教えてあげないと分からないということは、話さないと分からない、伝えないと分からない。子どもたちに伝えるには、こちらも昔のことを聞いておかないと伝えられない。昔、明治生まれのおばあちゃんたちが小平にお嫁に来た時に、どんな暮らしをしていたかということを聞き書きしたことなどを、子どもたちにも伝えている。
立川ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	郷土研究会は、会員が固定化してしまっているのが難点である。新たに入ってくれないので、寂しい感じもする。どうして若い人が入ってくれないのか。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	現在、会員は60数人だが、だんだん高齢化している。 平成11年から6部会（郷土史、拓本、民具、食文化、ＫＫＶ（郷土の暮らしをビデオに残す会）、ふるさと物語）に分かれ研究、普及活動をしてきたが、市民の皆さんにアピールするため、平成23年度は11月に小平市民文化祭に参加する予定である。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	各地の研究会で、そういう状況はあるようだ。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	市史編さん委員である香月洋一郎先生からアドバイスを受けて、青梅街道沿いの屋敷神について調べたが、こういうときは、今の世の中では突然訪ねていってもだめなので、知り合いを頼ることになる。立川アドバイザーにお願いしたり、また、私は昭和35年に小平に引っ越してきたが、その13年前、昭和22年に義母たちが小平に越してきて、地域の皆さんと親しくして、学校の役員などもやっていたので、その伝手を得て、私は「今井さんの家のお嫁さん」ということで、聞き書きのネタをいっぱいいただくことができた。 やはり、伝えることも伝わることも、「人」だと思う。
市長	多分、郷土研究会に若い人が入らないというのは、まだそういう余裕がないということではないか。私などは、ここに骨を埋めるので、骨を埋めるところがどんなところだったか知りたいというところがある。一定の年齢がくると興味が出てくると思う。 生まれは宿命だが、死ぬ場所は自分の意思で選べる。そこで初めて、少し時間ができたりすると、郷土研究会のようなものがあると「入ろうかな」と思うのではないか。 昭和30年代、40年代に移り住んだ人たちは、今だいたい70、80歳だから、お墓を求める人が多い。多摩地域の隠れた問題として、墓地問題がある。「ど

	この墓に入ろうか」というときに、例えば小平霊園であれば、「小平ってどういうところだったんだろう」と、ある程度自分の人生の先が見えてくると、意外と過去にこだわりが出てくるのではないか。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	高齢化社会が逆に墓の覚悟を遅らせる一方で、若い人が入らないというのは、先がまだ長いということがあるかもしれない。
立川ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	小平市の市民憲章の前文にある「新たに迎える多くの市民とともに」という言葉は、非常に魅力がある。
市長	新しい人を受け入れるという土壌がある。小平市はまさに開拓の町なので、みんな開拓者である。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	私が小平に越してきたときにも、「よそ者」という言葉を聞いたが、よそ者といったらみんなよそ者である。小平の七つの新田(しんでん)は、東村山や、武蔵村山などから人が来て開墾した。 先日、用事があって武蔵村山市に行き、小平から来たと言ったら、「こちらから小平に新田開発に行ったんだよ」と言われた。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	新田(しんでん)村は人々を受け入れる包容力があるといえるかもしれない。新しい人が住みにくいというところがない。 それでは次に、小平の伝統文化などで、残していきたい、次の世代に語っていきたいといったことがあれば、お話いただきたい。
立川ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	小平は、割合に教育に熱心な気風がある。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	学校もたくさんある。
立川ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	この国の年間黒字 25 兆円。そのうち物の売買、貿易で儲けているのが約 10 兆円、金利等で稼いでいるのが 16 兆円。パテント料、特許料で約 1 兆円で、寝ていても入ってくる所得、いわば浮利が 6 割を超えている。2、3 年前のデータで正確ではないが、だいたいこんな数字、これは好きな形ではない。実際に物を作って、買ってもらうような所得を多くするように、次の世代の人には頑張ってもらいたい。そういう人間を育てる教育に力を入れてほしい。

大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	小平は物作りの部分を強化したいという意見である。楽して儲けるのではなくて、創意工夫をして。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	やはり、小平の原点である玉川上水を大事にしてほしい。 それから、この間驚いたのだが、竹内家の大ケヤキの向こう側が、区画整理で武蔵野美術大学のほうにずっと開(ひら)けてしまった。あそこのあたりは、本当は、小平の原風景として、青梅街道に沿った短冊形の土地の様子をどこかに残してほしいが、無理だろうか。
市長	新田開発は、いわゆる江戸時代の区画整理事業のようなもので、これはきわめて精巧で、あの時代にしては世界的にも非常に精度の高いものだという。 小平市の将来を考える時に、ここが分岐点である。残念という思いと、逆にこれだけの都心に近い地域の中で、どういう住宅形成をしていくのかということがある。自分の代までは保障できるが、将来にわたって農業をやり続けていけるかというと、これだけ都心に近いと、相続税の問題や、次の世代の財産管理の問題がある。それを考えると、道路や下水を引き、都市基盤の整備をしておけば、例えば次の世代が農業を選ばなかったとしても、住宅開発は容易である。畑のままにしておくと、自分で道路を引いたりしなくてはならないので、莫大な費用がかかってしまう。区画整理事業ということで、国や東京都の補助金を活用して基盤整備をしておけば、次の世代が仮に農業を選択しても、農業を続けることができるということがある。 あのあたりはちょうど玉川上水があって、青梅街道、立川通りがあって、これまで開発の手から逃れ、風景が残っていた。 今農業をやっている人たちが、年齢を考えて、次の世代のことを考えたとき、土地を手付かずのままにしておくと、相続が起こったときに、農業を続けたくても税金で土地を手放さなければならなくなってしまうということがある。 確かに原風景が失われることは寂しくはあるが、記録で残すしかないのかなと。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	特例として、１軒分だけ残すことはできないか。
市長	青梅街道から延びている里道という１間幅の道に沿って住宅が建っているので、短冊形の名残はたくさん残っている。小平の地図を見ると、すべて青梅街道から南北に道が延びている。 区画整理のところは、短冊形の道に面して道路ができているので、破壊しているわけではない。面影はあるが東西に道路を入れるので少し形は変わる。

大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	武蔵野新田地域では、今でも、消防車や救急車が、道を１本間違えるとなかなか東西に行けないという話がある。短冊状の地割のせいだが、江戸幕府の八代将軍吉宗をうらむというか、大岡越前をうらむしかない。逆に今日まで短冊形の地形がよく残っているということである。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	もう一つ残してほしいのは、花小金井のほうで青梅街道に沿って大きいビルが建っている裏に少し入ると、雑木林が残っている。ああいうところを残していくことはできないか。税金の特例など考えられないか。とてもよいところが残っている。屋敷神を調べて歩いているときに発見し、「よいところがあるな、これは昔の小平の風景だな」と思った。
市長	私が 30 年前に小平に越してきたときは、屋敷林がたくさんあり、まだ野うさぎがいた。青梅街道があって、宅地があり、屋敷林や用水路があった。 用水路は生活用水であり、屋敷林の落ち葉が堆肥になって、江戸時代の当時としては非常に精巧な都市計画だったと思う。 屋敷林は売られるか、宅地化されるか、駐車場になるか、残念ながらなくなってしまう。また、屋敷林は落ち葉が問題になる。落ち葉が雨どいの詰まりの原因になるとか、あるいは大木になると台風の時などに倒れる危険性が出てきたときに、それに対応できないということで屋敷林を切ってしまう。 小平は新しい人を受け入れるということがある一方で、新しく来た人と農家とトラブルになることもある。小平市では、最後の牛舎が引き払われてしまったが、なかなか農業などをやり続けられる環境ではなくなってきている面がある。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	もう一つ、小平の開拓の町としての歴史をどう残すかというところがある。まさに今お話があった「残し方」の問題で、今回の市史というのは、ひとつの画期になると思う。 先ほどの、郷土研究会の活動を始めた時期と町誌編さんが重なっているということは意味があることで、郷土研究会の活動が、今日まで続いてきて、歴史研究を担ってきたことは大変なことだろうと思う。 今回新しく市史を作っていて、次に何を残せるか、いつも考えているところである。 前回のアドバイザー会議でお話したが、私には二つのライバルがある。ひとつはやはり昭和 34 年刊行の「小平町誌」という、かつてのすごい成果、今日まで生き続ける研究の集大成があって、それをどうやって乗り越えていくかと

	いうことがある。もうひとつは、今、八王子市が市史を作っていて、「お互い頑張ろう」という同時代のライバルということで意識している。昔のライバルと、同時代のライバルを意識しながら頑張っている。 　昔の町誌が、立川アドバイザーや今井アドバイザーが参加している郷土研究会のようなものを残せたとしたら、今回の市史では、将来に向けて、歴史を市民の見る目、あるいは子どもたちの目、高齢の方や青年が昔を懐かしんだり客観的に見たり、そういう制度やシステムをあらためて残したいと思う。
立川ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	先日、旅行で行った香川県高松市では、地元の小学生の子どもたちが、国の特別名勝である「栗林公園」の由緒を説明していて、黒山の人だかりになっていた。ひとしきり説明が終わった後には拍手が沸いて、プロのバスガイドさんも「一生懸命やっている」と感心していた。ああいう活動はなかなかよいと思う。聞いてみたら小学６年生で、平日は学校があってできないので、祝日・土曜・日曜に活動しており、もう何年もやっているとのことであった。こうした活動の何がよいかというと、郷土を誇りに思うということを言っていた。 　小平市は、歴史的建造物などは割合少ないが、探せば何かあるのではないか。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	私事だが、先日、新宿区の「新宿歴史博物館」で、新宿の戦前・戦後という写真展があり、戦前の方を見に行ったが、昔自分が住んでいた落合のあたりの写真が出ておらず、がっかりしたので、市史編さんも、手抜かりをしてはいけないと思った。写真や資料を出すときには、平等に入れてもらえるとよいとそのとき感じた。というのは、子どもたちが大人になった時に、自分の住んでいたところがないとがっかりする。平等に、いろいろなところに気配りをして、市史に入れられるとよいと思う。年をとらないと自分のふるさとはどうだったのか考えることはなかなかできない。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	トピック主義、中心主義でいくと一見何もないところは落ちてしまう。市史でもぜひ注意していきたい。 　今、お話に出たような博物館や史跡などが、今の市民の中にどう位置づいていくか、あるいは地域を大事にする気持ちとジョイントしていくか、すなわち文化財行政、教育行政ということだと思うのだが、市長から何かあれば。
市長	小平市は歴史が浅いので、古い歴史を守り育てるというよりは、歴史そのものをつくっていくという宿命みたいなものもあると思う。元々、人為的に川を作って、人為的に作られた土地であり、古いものを育てていくというよりは、歴史をつくっていく市であると思う。

	玉川上水についても、次の 50 年後に玉川上水をどうするのか、次の世代に残せる歴史を、どのように我々が種をまいていくかだと思う。玉川上水をただ残すというよりは、小平市で利用して、活用していくことが大切である。玉川上水を道路にする計画もあったが、私が都議会で質問をして止めたし、「玉川上水を守る会」の人たちが努力して、清流が復活したことは大きかった。そのように活用していくことによって、玉川上水を守る。玉川上水は、国の史跡指定もされているので、よもやなくなることはないと思うが、玉川上水をただ眺めているだけではなくて、次の世代に向けて、どう管理したらよいのかということを考えていったほうがよい。例えば、今なかなか土の道がなく、みな舗装されている中で、ウォーキングブームに玉川上水をどう活用していくのか。また、近所の人たちに理解をしてもらうためには、ある程度大木も伐らざるを得ない。それは、玉川上水を将来に残すために、伐らざるを得ない。 それから、市内には用水路が 52 kmあり、まだ水を流しているが、これはだいたい私有地の中を走っているので、どうやって残していくのか、利用・活用をどうしていくかということがある。 また、小平市の「灯りまつり」は、昔、地口行灯といって、遊びの少ない時代に駄洒落を書いた行灯をお祭りで飾ったが、これを再現している。市の無形文化財の「鈴木ばやし」も、農閑期のお祭りなどで行われたものだろう。こうした伝統のものを、ただ守り育てるのではなく、学校行事、授業の中で取り入れるとか、あるいは小平ふるさと村で定期的に演奏会をするとか、これからは単に残すというよりは、今あるものを活用して、もう少し付加価値をつけていく。 それから、市内に大学が６つあるが、ただ学校があるということではなくて、小平市の特徴としてうまく活かしていくためには、どうしたらよいか。これだけ市に教育施設が集中しているので、例えばグリーンロードとうまくコラボレーションするとか、何か、単発的ではなくて、総合的にできるとよいのではないかと思っている。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	玉川上水は、いっときは舟が通っていたので、年に１回くらい、桜の咲く時期などに舟を浮かべて通すとよいと思う。
市長	とても面白い話である。今おっしゃった舟を浮かべるということで逆に玉川上水を再発見してもらう。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	昔の話になるが、鈴木都政の「マイタウン東京」構想の時に、市史編さん委員の庄司さんたちのグループと一緒に、玉川上水の上流から下流まで、私が江

	戸時代から明治時代までの文献について、庄司さんが現状について調査をして、東京都に報告書を提出した。それ以来、上水の環境は、どのように変わっているのか――小平市はしっかりと守っている方ではないかと思っている。小平は、桜も上水もそうだが、歴史的な、守るべき、というか攻めるべき、活用できる文化財があることは、しっかり認識したい。
市長	守るだけではなく、新しい時代の付加価値をつけていく必要があると思う。 小金井桜についても、花小金井駅は、「花・小金井」ということで、もともとは小金井桜を見に行くための駅であり、あの駅で降りて、歩いて、花見に行ったという。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	地域おこしをしながら、歴史を振り返るというのはよいかもしれない。
市長	文献を出すだけではなく、どこかで行事を織り交ぜてやると、きっかけになるかもしれない。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	最後に、今、編さん中の小平市史は、市民とともに、市民目線でということでいろいろと工夫をしている。例えば、ホームページや市報での発信や、「市史研究」の刊行、講座・研究会のようなものも企画している。 市民目線から、市史に期待する部分をお聞かせ願いたい。
今井ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	分かりやすく、偏らない市史を期待したい。
立川ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	世界で初めて人工雪を作ることに成功した物理学者の中谷宇吉郎博士の言葉に、「雪は天から送られた手紙である」というのがある。中谷さんが奥さんに言ったという「人には親切にするもんだよ」という一言を、後に東京大学の学長になった同僚の茅誠司さんが聞いたことがきっかけで、「小さな親切運動」というのが始まったそうである。いまや世界を舞台に展開されている。 親切は、あらためていうまでもなくだれも皆やっていることではあるが、やはり形がほしいものである。大人は間に合わない、子どもたちに託したい。市史を作るときにも、何か「形」をにじませてもらいたい。
大石ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ	大きい部分だけではなく、確実なものも一方で必要になってくる。今、市史の近世編の目次の案を検討している。従来の自治体史では、江戸時代というと「近世村落の成立、発展」などといった学術用語、教科書用語のようなものが並んでいるが、今回は、野心的に市民に語りかける市史にしてみようというこ

	とで、例えば、第１章は「村ができる」――市域の村々ができる様子について、第２章の「村を知る」では、村政についてや年貢はどう納められるのかなどについて、そして第３章は「村が変わる」ということで、明治維新に向かって市域が変化する様子を目次としてあらわすことを考えている。そういう意味では、今回、「新しい市史」にふさわしいものができるのではないかと思っている。 小平の市史編さんは、周囲から見ると今、一番ラストで始まっており、そういう意味ではすごく注目されている。「今頃何だ」という意見も当然あるが、逆にいうと市町村の大合併があったことを考えると、今後またいろいろな市史、町史が出される可能性もある。そうした時に、小平市が周回遅れではなくて、一番先頭になる可能性もあるということで、これが小平モデル、小平スタイルとして位置づく可能性もあると自負している。 今までは、学術的な研究成果の集大成の自治体史であったものを、今度は一歩進んで、市民に語りかけることを目指して頑張っている。そういうところが市民とうまく呼応できて、市史への理解も深まるとよい。 それから最後に、今回の「小平市史編さん基本方針」では、「事業のために収集した資料や成果を効果的に活用し、記録資料の有効利用を図るために、完成後の調査研究の在り方について研究する。」とされているが、今回貴重な資料を集めたからといって、ただ守るのではなく、先ほど市長が言われたように利用・活用するということが書かれている。 資料館や博物館といった「箱もの」を造ることが難しい時期であることは重々承知しているが、せっかく集めた貴重な資料を活用するために、打って出る方策を考えていただけるとありがたい。
市長	小平市が新たな 50 年を踏み出すということで、市民目線で、市民の皆さんに活用され、次の 50 年が展望できるような市史でなければならないと思っている。

（文責：事務局）

平成22年度第3回小平市市政アドバイザー会議要旨

開催日時	平成23年3月29日（火）10時00分から11時45分まで
開催場所	小平市役所6階大会議室
出席者	小林　正則　市長 樺沢　純さん（都立小平特別支援学校中学部） 阿部　由加子さん（小平第一中学校） 中川　翔太さん（小平第二中学校） 森川　佳奈さん（小平第四中学校） 古川　裕斗さん（小平第五中学校） 谷地森　健さん（小平第六中学校） 大塚　海さん（上水中学校） 吉田　愛子さん（花小金井南中学校） 伊波　菜緒子さん（白梅学園清修中学校） 城戸　珠璃亜さん（創価中学校） （司会・進行）佐藤指導主事 （事務局）伊藤企画政策部長、有川政策課長、篠宮政策課長補佐、細村主査 （傍聴者27名）
会議次第	1.開会 2.市長あいさつ 3.生徒からの提案、意見交換 4.閉会
市長	中学生の皆さん、本日はようこそ小平市役所にお越しいただきました。 今回、予想できなかった大きな地震が発生し、ちょうどその地震の翌日、３月１２日が本来の予定であったが、大地震の中で開催するというのは精神的にも物理的にもできなかったため、今日に延期させていただいた。 計画停電や原子力発電所の問題など、日本の経済への影響が心配される。また、被災地の皆さんが早く普通の生活に戻れるように願っているが、多くの皆さんがそこに関わって、ご苦労されている姿を見聞きして、我々も何らかの形で協力ができればと思っている。 今回の特別企画「中学生からの提案」だが、事前に時間をかけて準備をしていただいた。私も皆さんからお話を聞くことをとても楽しみにしている。 小平市の事業を進める時に、日々の最終的な決断をするのが私の仕事であるわけだが、アドバイザー会議は、その決断や判断に誤りがないようにするためにいろいろな人からのアドバイスや助言を伺うものである。これまで大人の皆さんや専門性の高い人たちからのアドバイスを聞いてきたが、小平市の将来を

	担う若い皆さんの意見を聞いてこなかった。 　そこでちょうど平成２４年に、小平市が市になって５０年ということもあり、これを節目にこれから小平市を担い、中心世代となっていく皆さんの声を聞く機会を設けようということで今回企画させていただいた。 　また、保護者の皆さま、引率の先生方、新学期の準備などでお忙しい中、ご協力いただき、またご来場いただき、ありがとうございます。 　本日の会議にあたり、指導主事の佐藤先生には進行役をお願いすることとなったこと、また、生徒会での議論や、学年で取組みを行っていただくなど、各学校にご協力いただいたことに、感謝申し上げる。 　限られた時間ではあるが、皆さん、緊張せずに若さを存分に発揮して夢と希望を語っていただければと思う。
佐藤指導主事	それでは生徒からの提案、意見交換を始めさせていただく。
樺沢さん	５０年後の未来には、段差をなくしてほしいと思う。なぜなら、車いすをこぐ人は、前の車輪が上がらないから大変である。押す人も段差に足をひっかけてケガをしてしまうかもしれない。同様に、歩行器と杖も同じことがいえる。障害者の方なら、そのような事故を経験しているかもしれない。だから段差をなくしてほしいと思った。 　次に、地面を平らにしてほしいと思った。道が坂だと、車いすや歩行器を使っている人が勢いあまって人をひいてしまう。同様に杖の人も転んでしまうかもしれない。 　次に、街灯を増やしてほしい。なぜなら、段差に足をひっかけてケガをしてしまうから危険である。また、歩道を広くしてほしい。狭いままだと、人をひいてしまったり、人の足を踏んでしまったりしてしまうかもしれない。 　次は、ルネこだいらにエレベーターと駐車場をつけてほしい。車いすのままでは、階段は上れないし、駐車場がないと、車を停める場所がない。 　次に、駅のエレベーターを広くしてほしい。小川駅のエレベーターは、小さい車いすだったら２台、大きい車いすは１台も入らないかもしれない。だから、駅のエレベーターを広くしてほしいと思った。 　次に、小平の人口をもっと増やしてほしいと思った。なぜなら、たくさん人がいたほうが、賑やかでよいと思ったからである。 　次に、雨の日でも、みんなと遊べる広場がほしい。小平特別支援学校に通っているみんなの家から家に行くまでは一時間かかるかもしれない。遊べたとしても、その日が雨なら遊べない。だから、雨の日でも遊べる広場が近くにあるとよいなと思う。

	最後に、福祉を充実させてほしい。障害の重い子は、母親が死んだらどうなるのかと聞きたくなるぐらいである。だから福祉が充実してほしい。５０年後の未来はそんなふうになっていってほしい。
阿部さん	私は食べることが好きで、特に毎日ある給食が楽しみである。給食には小平市の農産物が使われることがあり、とても安心できる。生産者に直接話を伺うことができるし、育っている状況を自分の目で見ることができる点がよいと思う。 これからの時代、人間がどんどん増えていき、食料自給率の低い日本は食料を確保するのが難しくなると予想されている。その中でも今の豊かな日本では、好き嫌いが多く、食べ物を粗末にする場面がよく見られる。このようなことを一気に直そうとしても無理がある。今から少しずつでも見直していかないといけない。 私が望む未来の小平は、食べ物を大切にし、そこから発展して物を大切にするエコな小平である。 小学校５・６年の時、担任の先生が食の大切さの授業を行ったのが印象的だった。給食は全て残さずに食べるというのがモットーで、残ったご飯は先生が塩おにぎりを作ったり、先生が食べ物を盛りに来てくれたりした。また、特別講師として食肉市場の職員さんが小学校に来校して、食肉市場で働く人への差別的な手紙のことを話してくれた。このように、食の大切さを学ぶことは自己を高められることとなり、よいことであると思った。 全ての小学校で行っている訳ではないので、食の大切さの授業は一度はやるべきだと思う。 食の大切さから学べることはたくさんあり、限りのある資源を大切にすることも大切である。買い物に行ったとき、ビニール袋を一枚もらうのともらわないのでは、大きな違いが生じると思う。毎回のビニール袋をもらわない一歩を積み重ねることで、未来は大きく変わる。 大きく一気に変わるというのはとても難しいので、今から小さな一歩を積み重ねて将来の小平を変えていけたらよいと思った。 他のことでも市民が自らエコに挑戦して、リサイクルにも積極的に参加していく体制ができれば、よりよい小平ができるのではないかと思う。
中川さん	僕たち小平二中生は、この小平が改善すべき点をいくつか見つけた。 まず一つは、環境面で、ゴミが至るところに捨てられているということである。路上だけではなく、線路内、花壇や植木の中、さらには学校の敷地内にまで捨てられていることもある。地域の方々もボランティアで清掃活動を行って

	くれているが、ゴミを拾ったそばから捨てる人がいるなど、あまり効果は見受けられない。 　この問題への対策として、僕たちはゴミ拾いを小平市の行事としてはどうかと考えた。形式は自由参加とし、参加賞を用意することにより、より多くの人に参加してもらえるのではないかとも思う。そうして、市民の方々に、「ゴミを捨ててはいけない」、「捨てられているゴミは極力拾うようにしよう」、「街がきれいだということはとても快い」というような意識をもってもらえれば、ゴミは減り、きれいな街になると思う。 　次に、経済面についてである。小平市は住居はとても充実している。だが、企業が少ないため大きな税収がない。また、商業施設も多くはなく、商店街もあまり発展していない。そして、これらの根本的原因は、小平に住む人が少ないということになる。 　この対策として、小平を人が住みやすい街にしよう、という意見が出た。そのため、まずは商店街を発展させるべきだ、という考えに至った。具体的には、先ほどのゴミ拾い行事の参加賞に、小平市内の商店街で使える、商品券や割引券などをつけてはどうか。そうすれば、商店街を利用する人は増え、地域は活性化し、市全体も、賑やかになると思う。活気に溢れた街なら安心して住むことができる。このようにして、小平に住む人が増えれば、企業や商業施設も進出し、市の収入も増え、経済的にも発展すると思う。 　最後に、ルールを守る人が少ないということである。小平市では、横断歩道などを渡らず、平気で信号を無視したり、車道を横切ったりする歩行者が多く見かけられる。この問題に関しては、地域の方々の協力を得て、市全体が根気よく呼びかけていくしか方法はないと思う。 　僕たち小平二中生は、隣接する小川駅のロータリーを横切る人に対し、小平六小と連動して呼びかけ運動を行った。残念ながらほとんどの人は見向きもしなかったが、それでも、こちらの呼びかけに応え、ロータリーを横切るのを止めてくれた人も、わずかだがいた。さらに、その数は日に日に増えていった。 　そこで、今度は市全体で、もっと長い期間このような呼びかけを続ければ、それに呼応し、ルールを守ってくれる人は増えていくはずである。 　以上三点が、改善すべきだ、と感じた問題点である。ただ、小平をよりよくするために何よりも大事なのは、市民が一丸となり、協力し合うことだと思う。市民が自分たちの住んでいる街のために手と手を取り合い、力を合わせれば、この小平は、もっと素敵な市になるだろう。 　どこまでも美しく、どこまでも活気に溢れ、それでいて規律を重んじ、そして、何よりも人と人とが協力し合える、それが、僕たちの思い描く理想の小平市である。

森川さん	５０年後の小平に求めることを中学生という立場から考えて、私たちは大きく二つのテーマを見つけた。 一つ目は「安全」についてである。今、小平市では安全への配慮が欠けていると思われる点がいくつかある。例えば決して広いとはいえない道路、玉川上水沿いをはじめとした薄暗い道などが挙げられる。こういった道は通学路となっている学校が多くある。また、それらの道を大きな車が通ることもあり、危険につながると思った。私たちの学校の通学路でもある玉川上水の通りでは部活動によって帰宅が遅くなったり、一人で帰らなくてはいけなくなってしまったりする場合、辺りが暗いのに加え、茂みが多いことから不審者が来ても分からない状況にある。 ではどのように解決したらよいのか。例として、街灯を増やしたりする工夫が挙げられる。しかし、玉川上水沿いに街灯をつけない理由として、自然保護のため、と伺ったことがある。自然を大切にすることも必要なことである。ですが、小さな子供などへの安全面も第一に考えてほしい。また、私たちは、安全につながるためのもう一つの工夫を考えた。それは、「ユニバーサルデザイン」の指定を広げることだ。ユニバーサルデザインとは誰にでも使いやすく、公平に、自由に、をモットーにした施設・製品・情報のデザインである。この企画にのっとったものを増やし、安全面だけでなく様々な人と簡単に自由に関わりを持てるような工夫をしてほしい。 二つ目は、「教育」である。私たちは今、親だけでなく祖父や祖母のおかげでこの街に暮らすことができ、学校に通うことができている。だからこそ、学校生活を精一杯頑張り楽しむことが、中学生の私たちが今できる恩返しではないかと思った。 学校の授業とは少し離れるが、学校や体育館などの改修工事をしてほしい。また教育と直接関係はないかもしれないが、たくさんの人との会話を楽しめる場所が欲しい。例えばちびまるこちゃんに出てくる駄菓子屋さんのようなイメージである。 安全にいろいろな人たちと簡単に、自由に関わることができる、自分の子どもや孫たちが健全に、精一杯楽しむことができる、そんな小平になってほしいと思い、「安全」「教育」の工夫を期待する。
古川さん	小林市長が市長になって、小平市でマラソン大会を開催できるようにしてもらったので、陸上競技についての理解も深い方だと思い、話していきたいと思う。 僕は今、府中の陸上クラブに所属し、陸上競技をしている。種目は走り幅跳

	びである。中学から始め、今年は平成２５年に開催される東京国体の強化選手候補に選ばれた。今は、来年の全日本大会に出場するために、努力を重ねている。 　しかし、練習をする中で感じているのは、小平市のスポーツをするための環境がよくないということである。その一つは、僕の学校には陸上部がないことである。そのために、僕は毎回の練習に、府中や八王子、新木場などといった遠い練習場に行かなくてはならない。陸上部がある学校では、毎日仲間と一緒につらい練習を乗り越えているのに対し、陸上部のない小平五中では陸上競技をする生徒が２人しかいないのが現状である。確かにクラブ仲間との絆は深まったが、練習は週にたった２回である。これでは毎日部活動で練習をしている人たちに遅れを取ってしまう。例えば、昨年の東京駅伝で小平市はよい成績を収められなかったと聞く。小平市のすべての中学校に陸上部があれば、そんなことにはならないと思う。 　もう一つは、競技場の問題である。小平市には陸上競技の大会には不可欠である、ゴムでできた反発の強いタータンの競技場がない。大会と同じ環境で練習ができないということは、うまく実力が発揮できないことにつながる。実際に、僕の知っている人で、そのことが原因で実力が思うように発揮できず、都大会で入賞できる実力がありながら、入賞を逃してしまった選手も、この小平市にはいる。実際、タータンの競技場がある市の選手の都大会出場率や競技成績は、陸上部がない地域よりよいというデータもある。 　これらのことから僕が言いたいのは、小平市がスポーツをしやすい環境をもっと整えていただきたいということである。もちろん、僕としては陸上競技の環境を整えてもらいたいので、市長には陸上部がない学校にも陸上部を作っていただきたい。ただ、それは僕個人の意見だが、他の競技でも、同じことがいえる。たとえば、サッカーや、野球ができる競技場も数が少なく、土曜、日曜の使用申請では、たくさんの団体が予約に殺到し、あっという間に予約で埋まってしまい、なかなか使用できないで困っている団体が多いということも聞いている。 　市民が気楽にスポーツに親しめる環境、そして、強くなりたい選手が実力を十分に伸ばしていける環境を、この私たちのまち小平に作っていただきたいと思う。２年後には東京国体がある。これをよい機会に、様々なスポーツイベントなども企画してスポーツを盛んにし、将来的には、スポーツ都市小平として、市民が楽しくスポーツに親しむとともに、世界で活躍する一流のアスリートが続々と出てくるような小平市にしてほしいと願っている。

谷地森さん	「２０５０年、東京都小平市は、新たな取り組みを始めました。」――５０年後にこんなニュースが流れるような小平市になってほしいと思う。その新たな取り組みというものを、僕は２つ考えてみた。 一つは教育についてである。今、日本の就職率は低くなっている。この不景気の中で企業が社員を削減しているということもあるが、就職すること、仕事をすることに興味が湧かない、面倒くさい、という理由の若者が増えているようである。そういった若者はどうしたら仕事に興味が湧くのか。 僕はこう考える。現在多くの中学校で職場体験が行われているが、それ以外に現役でその仕事の第一線で活躍している方々を学校に招いて、話を聞くことである。そしてその職に就いた理由、やっていて楽しいこと、職を手につけることの大切さや面白さなど、仕事へ興味が湧くような話をしてもらえれば、少しでも興味が出てくると思う。また、こんな仕事に就きたい、そのためには、どんな資格が必要なのか、高校は卒業しなければならないのかなど将来の事を真剣に考える機会が増えてくると思う。若者が夢を持つことが、市全体を活性化させることと思う。 二つ目は、地域の輪についてである。僕の出身の小学校から、すぐ近くの所に「さわやか館」という施設があり、そこはデイサービスセンターと、児童館の機能を両方備え合わせている。学校行事として、しばしばそこにいるお年寄りとの交流会などをしていた。お年寄りから教わることは多かった。囲碁、将棋なども教えてもらった。それから、僕たちのやった紙芝居劇で涙してもらった事もあった。今考えても、貴重な時間だったと思う。こういった場所を増やしていけば地域の輪も広がり、温かい小平になると思う。 そして、今回の震災を受けて僕なりに考えたことがある。市のホームページには情報がすぐに更新され、とても役立った。しかし、お年寄りや障害者の人たちには伝わらない部分が多くあると思う。そういったときのためにも、自治会や地区班といった小さな単位での絆を深めることが大切だと思う。そうすれば、より多くの人に正確な情報が伝わると思う。 もう一つは、今回、区内に勤めている人たちが帰宅難民になってしまった。そういったときのためにも、小平の体育館のような場所に一時避難所を作って欲しい。そうすれば家族も安心できる。これまでのような事を実現するためには、多くの人々の意識を変える必要があると思う。 僕の考える未来の小平はこんな感じである。人々が温かくなれば市全体も温かくなり、人々が希望を持っていきいきと生活できると思う。僕の育った小平、いつまでも素晴らしく、住みやすい場所であってほしい。

大塚さん	僕には小平市についての要望が四つある。 一つ目は、学校にエアコンをつけてほしいということである。毎年、夏になると、熱中症によって倒れる人が続出する。去年は異常な猛暑だった。もしかしたら今年はもっと暑くなるかもしれない。そうなると、さらに熱中症になる人が増えてしまう可能性がある。そうしたことにならないためにも、エアコンをつけてほしいと考えた。 まず、最初にとりつけるとするなら体育館がよいのではないかと思う。その理由は、長い時間体育館に居続ける朝会時などに、具合を悪くする人が多いからである。体育館に設置することができたら、各教室にもつけた方がよいと思う。最近になって各教室に暖房が置かれたが、むしろ深刻なのは寒さではなくて、暑さのほうだと思う。 二つ目は、三年生の教室を最優先して、空気清浄機を取り付けてほしいと思う。冬になると、空気が乾燥してウイルスや細菌が活発になり、病気になる人が増える。特に三年生は、受験を控えているので、体を大事にしなければいけない。それには、そういったウイルスや細菌の拡大を防いでくれる空気清浄機が、受験生のためとなるのではないか。 三つ目は、小平市に大規模な公共施設を作ってほしいことである。例えば、小金井公園などのような大きい公園である。小平は周辺の市と比べて人口が多いので、小さな子供から大人まで楽しめる大きな公園を小平に作れたらよいのではないかと思う。その他にも、大きなデパートを建ててほしいということである。小平にも、国分寺や武蔵小金井のような建物ができれば、利用者や利用回数が増え、小平市に親しみを感じる人が今まで以上に多くなるのではないか。 四つ目に、小平市の交通について、少し気にかかったことがある。まず、道路が狭いことである。中でも、五日市街道や青梅街道は危険で、渋滞が頻繁に起こっている。もう少し道が広ければ、歩行者や自転車、そして車も、安全に、楽に通行ができると思う。 僕たちが住んでいる市、小平が、今まで以上に住みやすく、皆が笑顔になるような楽しい場所になったらよいなと思っている。
吉田さん	「緑を今よりもっと増やしてほしい」、「安心・安全な小平になってほしい」、「人と人との繋がりが深い小平になってほしい」。これは、花小金井南中学校の全校生徒に「こういう小平に私は住みたい」というアンケートをとった結果、どの学年でも共通して多かった意見である。私はこの三つの中で、「安心・安全な小平になってほしい」という意見に着目した。 私は、通学路が明るく、毎日安心して安全に登下校できるような小平になっ

	てほしいと思う。現在小平には、街灯がなく暗い通学路が多くある。通学路が暗い道だと、事故や事件が起こりかねない。街灯がなく暗い道だと、自然と人も通らなくなり、不審者が出たりする。その道を通学路として利用している学生たちは、周りに人がいないと助けを呼ぶことができず、危険な目に遭う可能性が高くなる。また、自転車等の交通事故も危険が増す。このような事件や事故が原因となり、尊い命が奪われたり、被害に遭ったりする人がいることは、本当に悲しいことだと思う。被害者を少しでも減らすためには、暗い道に一つでも多くの街灯を設置する必要があると思う。いつでも明るい街で、学生たちが毎日安心して登下校できるような小平になってほしいと思う。 　また小平の学校、特に小学校では、保護者の方々が子どもたちの安全を見守るために、いろいろな場所でパトロール運動を行っている。このような活動は「人と人との繋がり、地域活動」と「安全な街づくり」とが一つになっているものだと思う。人と人とが繋がって協力するから、安全な街がつくれる。でも、人と人とが繋がるということは、一見簡単そうに見えて、実は難しいことだと思う。だから、人と人とが触れあえる場所や活動を多くすることで、人々の繋がりが自然に深まるようにすることができればよいと思う。 　例えば、緑を増やし、公園を増やし、人々の憩いの場所を増やしたり、今地球規模で問題となっているCO_2削減のためのＥＣＯボランティア等を推進したり、人々が集える機会を増やすとよいと思う。そうすることで、緑が増え、エコな街になると思うし、人と人との繋がりも深くなり、そこから安全な街にもなっていく。このような小平になっていってほしいと思った。 　また、今回の東北地方太平洋沖地震の影響でたくさんの方々が被害に遭い、苦しい生活を強いられている。私たちの学校ではそのような方々の力になろうと思い、募金活動を始めた。全校生徒が募金活動に参加し、多くの義援金が集まった。この募金活動を通じて私は人と人とが同じ目的のために一つになる素晴らしさを感じた。もし東京に大きな地震が来ても人と人とが一つになれば、どんなことでも乗り切ることができると思う。私も自分のことだけ考えずに、周りのことも考えて行動したい。
伊波さん	私は、どこも土地が平らで緑が多いので、小平が好きである。自然豊かなこの街は、５０年後はもっと住みよい場所になっていてほしい。そこで、私が考える５０年後の小平のかたちを表したいと思う。 　まず、小平の良い所は、玉川上水が流れていることである。私の住んでいる所は特に、様々なイベントや日常が玉川上水を中心に広がっている。例えば豊かな木々や、ごみ拾いなどのボランティア活動等である。我が家では川沿いを休日に散歩することもあり、緑道は学校の通学路でもある。とにかく、私の生

	活に玉川上水はなくてはならないものなのだ。 　しかし、舗装の進んでいない道は雨の日はもちろん日頃から転びやすく、気をつけなければならない。また、上水沿いだけではなく、小平市全体が、舗装されていないところがあり、春先はとても埃っぽい。いつも外を歩いているので、これは私にとってはとても大変なことである。 　これらの点を改善できれば、車いすの方や老齢の方も、一年を通して玉川上水沿いを歩いたり、四季を楽しんだりできるのではないかと思う。 　舗装というとアスファルトを思い描くが、アスファルトで埋め立ててしまうと、折角の景観が台無しになってしまう。道路はコンクリートで整え、上水沿いは、ボランティアで小石を除いたり柵を作るというような活動で整備すればよいのではないかと思う。 　四季の象徴である玉川上水は、ごみを取り除き、道を通りやすくすることで、もっと様々な人が安心して利用できると思う。また、生えている植物の名前や、近くにある店などをもっと分かりやすくまとめて紹介することで、単なる通り道ではなく、玉川上水自体を小平市の名所のようにできるのではないだろうか。 　今の小平も好きだが、このようなことに目を向け、玉川上水沿いだけではなく、他の場所も、全ての市民が使いやすいように改善すれば、土地が平らな小平はもっと良い町になるのではないか。小平がそんなふうになったなら、私はおばあちゃんになってもこの町に住んで、緑道を散歩したいと思う。
城戸さん	この話をいただいて、創価中学校２年生では、全員で将来の小平市に目を向けていこうと取組みを始めた。まず初めに、５０年前と現在の小平について校長先生から教えていただき、その後各班に分かれて、このようなマインドマップを作成した。各班で様々なアイディアが生まれ、とても有意義な発表会ができた。その中で出たアイディアのうち、いくつかを紹介する。 　一つ目に、「玉川上水にホタルを！」である。先日、上水公園テニスコートの隣に建っていたホタルの飼育施設が撤去され、いま身近にホタルを見ることができなくなった。そこで、ボランティア等を募集して定期的な清掃を行う、木や花を植える、またそのための「玉川上水友の会」を結成する、というのはどうか。私たちの子どもやその次の世代まで、人々と自然が共存できる玉川上水を残し見せることができるようにしていきたい。また、小平の人々が守り大切にし続けてきた玉川上水の美しい環境を、これからの世代である私たちが受け継ぎ、守っていきたいと思う。そして５０年後には施設ではなく玉川上水にホタルを呼べるような、自然と調和した街になってほしいと思う。 　次に、「地域交流の大拠点、新中央公園プロジェクト！」である。中央公園

	の土地を広くし、水遊びの施設を造ったり、水をきれいにして魚を増やし、釣りができるようにしたりすると地域の活性化につながる。また、ドッグランや展示室を造ったり、和室を設けてお茶会等ができるようにしたりするという案も出た。こうすることにより地域の交流がさらに深まり、防犯にもつながる。 　ほかにも、面白い案として、小平の特産物ブルーベリーで小平市にテーマパークを造り、ブルーベリーのキャラクターも作ろうというものである。そうすることにより、小平で初めてブルーベリーが栽培されたことを伝統として伝えいくことにもなる。また、大自然の中にツリーハウスを造ることも提案したいと思う。自然の中で勉強したり遊んだりするなかで感受性が豊かになり、思いやり溢れる子どもを育てることができるのではないか。 　最後に、小平を発展させていくにあたり、一番大切なことは、やはり地域の人と人との交流、触れ合いだと思う。私は登校する時に毎日会う人にあいさつをしている。初めはあいさつを返してくれなかった人も、だんだんと心を開き相手の方からあいさつをしてくれるようになり、とても嬉しかった経験がある。小平に生活する者として、誰もが笑顔で過ごせる街、何世代にわたっても住み続けたいと思われる街になってほしいと思う。私も、もっともっと勉強して、地元に貢献できる大人に成長していきたい。
佐藤指導主事	皆さんからの意見、一通り終わった。今回の東北地方太平洋沖地震のことや、日々体験していること、経験していることなどを受けて意見を述べていただいた。 　これからもう少し小平市の将来について考えていきたいと思うが、まず市長からお話をいただきたいと思う。
市長	皆さんご苦労様でした。もっと奇抜なものや突飛なものが出てくるかと思ったが、皆さんまじめに正直に小平市のことを考えてくれていると感じた。 　樺沢さんのお話だが、段差をなくしてエレベーターの設置であるとか、福祉の充実については、樺沢さん自身が体験されてのことだと思うが、小平市は人口の２割が６５歳以上になってきていて、高齢社会になった時にはどうしてもバリアフリー、段差解消、エレベーター設置、歩道拡幅などが必要となっていくので、そういったまちづくりは取り組んでいかなければならないと思っている。市の方針として、エレベーター、エスカレーターの設置など、まさに５０年後のまちづくりといったテーマになるのかもしれないが、こういった方向でやっていきたいと思う。

	阿部さんのお話だが、日本は食料自給率が低く、日本の食糧をどう日本の中で確保をしていくか、ちょうどよい議論のテーマを与えてくれたと思っている。 私などは食べ物が十分に与えられていない戦後の時代だったため、自分の体験からしても、小さい時から絶対に食べ物は残すなと育てられた。皆さんは食べ物が豊富な中で、残すなということはなかなか難しい。まず自分が実践して、人にも伝えていくということ。多くの人に全部一緒にやろうというのは難しいかもしれないが、思った人がまず実行して仲間に伝えていく活動をしていく。買い物も、まずは自分で買い物袋を持っていって、ゴミになるものを自分は貰わないということ、先程の食べ物の話もそうだが、そういうことを感じて欲しい。そういう人が大勢になってくれば、レジ袋も必要なくなる。そういうふうに小さな一歩からでも、やっていってもらえるとよい。 市でも、処理場でゴミとして燃やして、燃やしたものを日の出町の大きな谷に埋め立てている。埋め立ててしまうと、動植物の居場所を奪うことにもなる。ゴミを出さないことは、ゆくゆくは自然環境を私たちが守ることになる。市としても取り組んでいきたい。 中川さんのお話だが、ゴミ拾いをするということは、ゴミを出している人に対するメッセージ、ゴミを出してはいけないという啓発活動として、最終的には、ゴミは捨てないということにつなげていかなくてはならないと思う。 商店街の活性化は、取り組んでいるところも結構多い。小平市でも昨年度、プレミアム商品券といって、一割上乗せをして１０パーセント余計の買い物ができて、市内の商店街だけで通用する商品券を発行した。それで地域の商店街の活性化を図るという事業である。しかしこの１０パーセントのプレミア分は税金で負担しているので、それをずっとやり続けるということがよいことなのかどうかは、納税者の皆さんの理解も得なくてはならない。 商店街の活性化というのは、その商店街が存在することで、街が明るくなり、人が集まり、情報が行き交い、商店街を通して情報発信ができ、人が集う交流の場となっていくものだ。そういう点で活性化というのは、いろんな意味でこれからてこ入れをしていかなくてはならないと思う。 小川駅のロータリーを横切る人への呼びかけは、これも息の長い活動をしていかないといけない。小さい頃から安全教室などをやって、ルール、マナーを守ってもらうということでやっているが、中川さんのしていることは、ずっとやっていかなくてはならないことだと思う。悪いことだと知っていてやっている人に、どう理解してもらって止めてもらうかというのは、大人に対しては難しい。道路交通法など法律もあるが、それを取り締まって厳罰に処すというこ

	とができるかどうかとなると、なかなか難しい。自ら交通ルールをしっかり守っていく。最後は個人個人が、自分で自覚を持ってということになるのだと思う。 森川さんのお話だが、緑が多いということは茂みが多いということで、緑が多くなればそういった暗い部分、光が当たらない部分が当然できる。葉が落ちればごみも発生するし、緑が多いことによって発生するものに対して、我々が受け入れられるかどうかという問題がある。緑は欲しいが落ち葉は困る、公園は欲しいが自分の家の近くはうるさいので困る、ということではいけない。市に寄せられる苦情には、公園の騒音、落ち葉が放火の原因になるから木を切ってくれ、というものもある。しかし市民の要望で一番多いのは緑が欲しいということであり、これはなかなか難しいところである。良いものを求めるのであれば、煩わしい面も引き受けなくてはならない。 駄菓子屋さんだが、万引きが多くて潰れるという話も聞くことがあるが、駄菓子屋があるようなゆったりとした街はよいものである。最終的には地域を構成する一人一人が自覚を持っていくということではないかと思う。 古川さんのお話だが、小平市の中央公園のグラウンドは、四種公認のグラウンドとなっている。様々なスポーツの団体の意見も聞くが、共通の悩みはグラウンドがないということである。皆さんの希望に沿えるように施設を作れると良いのだが、グラウンドの確保にはお金と場所が必要になる。候補の土地があれば検討はしたいと思う。河川敷がある自治体などは、国土交通省の許可を得て、グラウンドとして使うことができているが、小平市にはそういった河川敷はないし、場所の確保がなかなか難しい。小平市は、若い人も多い町で、スポーツ振興は青少年の健全育成にも役に立つので頑張っていきたい。復活した小平市の駅伝は申込みが多く、一部のチームに出場を断念していただいた。次回はストップウォッチがなくても記録が計測できるような仕組みを作って、できるだけ申込団体を全て受け入れるような形で運営していきたい。 谷地森さんのお話だが、働く場所が少ないということだが、求人にミスマッチがあり、大手企業は倍率が高いが、中小零細企業等は逆に求人しても人が集まらないという話もある。大手は安定していて良いのかもしれないが、安定を志向するのではなく、自分のやりたいことがないといけない。いろいろなアルバイトをするとよいと思う。働くことは自己主張、自己の存在を明らかにすることでとても大事なことであると思うし、人間に欠かすことができないことだと思う。何をやりたいかを見つけて、仕事に就くことだと思う。

	また、年配の人から教わることはとても大事である。お年寄りは厳しい時代を生き抜いている。人生は一度しか経験できないから、読書やお年寄りから話を聞くことは、自分が経験できないこと聞くことができるので、大切にしてほしい。 大塚さんのお話だが、昨年の夏の暑さは異常だったので、今年も同じ状況が続くとは限らないが、市としては小中学校にエアコンを設置していく予算を組んだので、解決されていくと思う。ただしエアコンをつけるということは、CO_2が発生する。緑を増やし、環境負荷の少ない暮らしをしようと言いながら、エアコンをつけると矛盾してしまうので、なかなか難しいところだが、まず勉強ができる環境を整えることが大切である。それから、エアコンを体育館に、ということであるが、じっくりと勉強するところで考えると、教室が優先されると思う。 小平市がどういった市を目指すのかを考えた時に、新宿や立川のような賑わいを求めるということでよいのかどうか、という議論がある。賑わいがあるということは、先ほどの緑の話と同じく、一方で例えば好ましくない商売なども出てくる。そうすると治安の悪化、犯罪が出てくる。賑わいの裏返しには、必ず皆さんくらいの年齢の人には危険なものが同時に存在する。 小平市がそういう街を目指すのかということになると、私は他市から大勢が買い物に訪れるようなまちではなくて、域内流通、つまり小平市の人が市の中で消費をしてもらえるような、小規模な商店街や建物等がよいのではないかと思う。緑が多くて環境に優しいということでいえば、あまり大きなビルがあればそれは当然日陰ができ、そうすると環境の部分ではマイナスになる。小平市は高級な住宅都市であるから、大きなビルなどは必要ではなく、安全安心なまち、犯罪の少ないまちがよいと思う。 吉田さんのお話だが、緑をもっと増やして欲しいということだが、先ほどの大きなビルを作ってほしいという意見と相反するのだが、緑を多く作る街を受け入れる覚悟が必要であると思う。私は、光と陰というものは必ずあると思う。２４時間、昼も夜も変わらないような明るさを求めてよいのかという面もある。夜はできるだけ活動を控えるとか、そういうことも必要だと思う。個々が環境に配慮した街をつくっていくという思いを、日常生活の中で持っていくべきだ。 伊波さんのお話だが、私も玉川上水の近くに住んでいる。本当に小平市の財産だと思っている。文化財保護法の指定を受けている歴史的財産である。

	小平市は玉川上水が引かれて、枝線として用水路が引かれ、開墾されて、人が住めるようになった。その一番初めの開拓の基礎は、玉川上水である。一番当時の原型に近い形で残っているのは、小平市である。これを小平市の観光資源にしたり、歴史的な財産として将来にわたって守っていきたいということを考えている。あそこをアスファルトにすることには反対である。土の道だから魅力がある。 おばあちゃんになっても住みたい街という話だが、小平は平らで緑も多く、歓楽街もなく犯罪も少ない。皆さんからすると、もっと刺激や活気があった方がよいのかもしれないが、それは裏返してみると危ないことにも遭遇するということである。 城戸さんのお話だが、用水路には昔はホタルがいたそうである。玉川上水は現在下水の処理水を流しているので、今の状態ではホタルを放すことはなかなか難しい。将来、地下水を用水路に流して復活させるようなことはあるかもしれない。それぐらいの気構えでいけるとよい。私はホタルの住めるようなまちにしていきたい。きちんと清流復活して、ちゃんとホタルが子孫を残せるような環境をつくってあげることが大事である。 小平市では、ブルーベリーを生かした特産品を開発して売り出している。 それから中央公園にドッグランの設置をするとか、テーマパークにするという要望だが、公園というのは、ボール遊びができる公園が欲しいという人とだめだという人、犬猫についても入れてはいけないという人もいる。 施設をつくればよいというものではなく、一方で、動物を飼うときにどういう飼い方がよいのかといった議論がなくてはならない。現在、捨て猫捨て犬が多く、そういった人間の無責任さをしっかり考えていく必要がある。その上で、設置を考えてもよいと思う。
佐藤指導主事	今、市長から一人ひとりの発言に対して、小平市の現状や市長自身の経験などを踏まえた話があったが、市長の話、またお互いにお互いの考えを聞いて、聞いてみたいことや、自分はこう思うといった意見があったら、積極的に発表してもらいたい。
城戸さん	一中の阿部さんに質問だが、食肉市場に届くという差別の手紙の話があったが、誰からどういうものが来るのか。
阿部さん	差出人は匿名で、食肉市場で働く人に対しての抗議、差別の手紙と聞いた。手紙を出す人も肉を食べているだろうに、矛盾した話であると思う。

市長	どこかの小学校で豚を飼って出荷したときに、みな泣いてしまったという話があったが、人間社会は、生き物を大事にしようと言いつつ肉を食べるなど、そういう部分はある。 人間は環境に与える負荷が大きい。人口も増えており、地球がその負荷に耐えられなくなるという。人口問題は環境問題、食糧問題になる。環境問題を考えると、人口問題や経済問題になったりする。このテーマで考えると面白いと思う。
佐藤指導主事	他の意見の中には、小平市にもっと人が住むとよいという意見もあったが。どうか。
谷地森さん	一中の阿部さんに質問だが、物を大切にすることは自己を高めることというのは、具体的にはどういう意味か。
阿部さん	物を大切にすることから、いろいろ考えて、自分が成長していけるということである。
樺沢さん	花小金井南中の吉田さんに質問だが、発表の中で緑を増やしたいと言われたが、どのあたりで増やせると考えているか。
吉田さん	最近は住宅街でも緑が多くなってきたが、その中でも緑が行き届いていないところがあるので、人が自然と共存して、ゆったりとした空気で毎日を過ごせるような街になってほしい。今、緑がないようなところにも、緑を増やしてほしい。
佐藤指導主事	環境問題は、ほとんどの方が触れているが、自然との共存ということはとても良いことだと思うが、皆さんの考えがあれば。
伊波さん	家の庭には植物がたくさんあって、手入れなども大変である。果実に袋かけをするとか植え替えをするとか、手間がかかり、自然は手間ひまをかけないと元の姿を保つことができない。緑がほしいのであれば、葉の片付けなど世話が必要だし、公園の騒音もないようにするとか、緑の管理もきちんとしていくことがよいと思う。
城戸さん	玉川上水に水が流れていることや、そこに住む生き物に餌を与えている人もいて、共存ができていると思う。小平に住む一人ひとりが玉川上水の環境を考

	え、大切にしていくことによって、きれいな川になってきたりしているのだと思う。 　何かが欲しいなら自分も何かをしなければならないというのはそのとおりで、今までもそのように続けられてきて、次の世代の責任として、玉川上水などの環境をきれいに残していきたいと思う。
佐藤指導主事	今日、市長や皆さんの話を聞いて、感想なども含めて、５０年後の小平市に向けたメッセージをお願いしたい。
樺沢さん	皆さんの意見がよくまとまっていて、勉強になった。環境について、僕もそのように考えていたので、大変よかった。
阿部さん	安心で安全なまちをつくることが大切だとわかった。そのためにも人と交流できる場、繋がりが持てる場が増えて、より良い小平ができていくとよいと思った。
中川さん	皆さんの意見を聞いていると、緑を多くしてほしい、安心安全なまちにしてほしい、総合すると、人と人との触れ合いをもっと多くという意見が出ていて、そのとおりと思った。人と人とが触れ合って、協力すればできないことはないのではないかと思う。皆さんの意見は大変興味深く、本日は有意義な時間を過ごすことができた。
森川さん	皆さんの話を聞いて共感できる部分が多かった。これらを生かして、よりよい小平になるとよいと思う。
古川さん	皆さんの意見の中で、緑やブルーベリーの話が多かったが、それを増やしていくには世話をする人が必要だ。僕たちの生徒会のスローガンは「心のバトン広げるバトン」といって、心のバトンで地域の輪を広げて、様々な行動の中で絆を深めていって、いろいろなことをやろうという気持ち、そのバトンでみんなと一緒に、世話をする人を増やして、緑などを増やしていくことがこれからの小平に必要だと思う。木の葉には防音効果もあると聞く。木の世話などを、学校を中心に地域の人としていきたい。
谷地森さん	皆さんの意見を聞いて、環境と安全が第一なのかなと思った。５０年後、自分たちがこの小平を引っ張っていけるとよいと思った。

大塚さん	今回僕はエアコンをつけてほしいという意見を出したが、皆さんの意見には緑を増やしてほしいとの意見があり、エアコンは人間の都合でつけるものなので、人間の都合で緑を壊すのは勝手だと思った。皆さんの意見を聞いてよかった。
吉田さん	皆さんの意見を聞いて、自分では考えていなかった５０年後に何を望むのかを聞けてよかった。あらゆる点に目を向けて、人々が住みやすく、ずっと住んでいたい小平になってほしいと改めて思った。
伊波さん	人と関わったり皆で力を合わせたりすると、様々なことができるということをこの機会に学ばせていただいた。今回の会のように皆で意見を出し合っていって、５０年後の小平がもっと住みやすくて良いまちになるとよい。
城戸さん	たくさんの学校の方々の意見を聞いて、思っていることは皆同じで、良い街にしていきたい、安全な街にしていきたい等、思っていることが分かった。私たちは今できることをして、一生懸命勉強して、人の役に立つためにどんなことができるかという可能性を広げていくことが、自分たちにできる一つのことだと思う。そして環境を考えたりすることも大切だと思う。近所の人、学校の人、人と人との繋がりを大切にして生活していきたい。
市長	ご苦労様でした。私も娘が二人中学生だが、親子だとなかなか中学生の考えが聞けないが、有意義な時間だった。環境や安全の問題は、否定する人はいないが、難しいのは具体化していくと意見が少しずつ違ってきて、対立することもある。将来大人になって、皆さんが純粋な思いを貫くということは、障害もあると思うし大変だと思うが、５０年後まで純粋な思いを持ち続けてほしい。 ５０年後は、私はもう生きていないと思うが、私ができるのは小平市の長い歴史の中では一瞬だが、バトンが私のところで途切れないように任務を果たしていきたい。 みなさんも、自分の考え方をしっかり持つことが大事で、夢や希望のために努力することが大事である。そうすれば障害が大きいほど一回りも二回りも人間として成長できる。これからの皆さんには障害が大きいと思うが、障害から逃げずにぶつかって、小平市の50年後を皆さんが中心世代として担って欲しい。

（文責：事務局）

平成２２年度
小平市市政アドバイザー会議報告書

平成 23 年 6 月発行

編集・発行　小平市企画政策部政策課
〒187-8701
東京都小平市小川町二丁目１３３３番地
電話番号　042－346－9503
電子ﾒｰﾙ　seisaku@city.kodaira.lg.jp
３５０円

この報告書は再生紙を使用しています